

鍛治屋敷前遺跡

—第3次発掘調査報告書—

2018年3月

仙台市教育委員会
株式会社 同事

序 文

仙台市の文化財行政に対しまして、日頃から多大なご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

富沢駅西地区は、仙台市南部、富田富沢に広がる田園地帯でしたが、仙台市高速鉄道南北線の開業以来急速に宅地化が進む富沢駅周辺地区や富沢南地区に隣接している地域であります。平成25年度から進められております「仙台市富沢駅西土地区画整理事業」の進捗によって街並みが整いつつあるところです。

鍛冶屋敷前遺跡は、これまで古代の集落や、鍛冶に関する施設や遺物が発見されている遺跡ですが、今回の調査では竪穴住居跡や大きな溝跡などが発見されました。本書はそれらをまとめたものです。

先人たちの残した貴重な文化遺産をこれからの「まちづくり」の中で保護し、保存活用を図りながら、市民の宝として永く後世に伝えていくことが、現代に生きる私たちの責務であると考えております。ここに報告する調査成果が学術研究のみならず地域の歴史を解明していくための資料として広く活用され、文化財に対するより深い関心とご理解、保護の一助となれば幸いです。

また、発掘調査並びに報告書刊行につきまして、特に事業者である株式会社同事様には、埋蔵文化財及び発掘調査の重要性をご理解いただき、ご協力いただきました。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書刊行に際しまして多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことに深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成30年3月

仙台市教育委員会

教育長 大越 裕光

例 言

1. 本書は、「事務所付共同住宅新築工事」に伴い仙台市教育委員会が実施した鍛冶屋敷前遺跡第3次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び報告書の作成業務は、仙台市教育委員会の委託を受け、国際文化財株式会社が行った。
3. 本書の作成及び編集は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係 工藤信一郎、高橋純平、主濱光朗の監理のもと、国際文化財株式会社が担当した。
4. 本書の執筆は下記のとおりである。

第1章第1節…主濱光朗(仙台市教育委員会)

第1章第2節、第2章、第3章、第4章、第5章第1節2.SD、第2節1.SI、3.SD…江藤 敦(国際文化財株式会社)

第5章第1節1.SK、3.ピット、第2節2.SK、4.SX…伊藤裕基(国際文化財株式会社)

第6章…工藤信一郎(仙台市教育委員会)と江藤 敦の協議による。

編集は、江藤 敦が担当し、伊藤裕基が協力した。

5. 石器の実測・石材の鑑定及び観察表の作成については、熊谷亮介(東北大大学院)が行った。
6. 発掘調査及び報告書の作成にあたり、以下の方々にご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)
株式会社同事、同事建設株式会社、株式会社ASKA 総合計画
7. 報告書及び報告書に関する諸記録、出土遺物等の資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

凡 例

1. 本書の土色については「新版標準土色帖」2014年度版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
2. 第1図の地形図は国土交通省国土地理院発行「仙台南西部」1:25000を使用した。
3. 遺構図中の座標値は世界測地系「平面直角座標第X系」を基準としている。図中及び本文中に記載の方位の北は、座標北を示す。
4. 図版中のレベルは海拔高度(T.P)を示す。
5. 層位名は基本層序をローマ数字、遺構内堆積土については算用数字を使用した。
6. 本書の検出遺構については次の略号を使用した。
SI: 竪穴住居跡・竪穴遺構 SD: 溝跡 SK: 土坑 SX: 性格不明遺構 P: ピット
7. 遺構観察表において()は残存値を示す。
8. 本書の出土遺物の分類と登録には次の略記号を使用し、分類ごとに登録番号を付した。
D = 土師器(ロクロ調整) Ka = 剥片石器 Kb = 磨製石器 Kc = 磯石器 Kd = 石製品 I = 陶器 P = 土製品
9. 遺物観察表において()は残存値を示す。
10. 遺物実測図の縮尺は1/3を基本としたが、剥片石器は2/3、磨製石器・石製品は1/2とした。
11. 土器の実測図に使用したトーンは、以下の通りである。



黒色処理

12. 石器・石製品の実測図に使用したトーンは、以下の通りである。



13. 掲載した遺物写真の縮尺は原則として遺物実測図に準じた。実測図を作製せず、写真報告とした遺物の縮尺は1/3としている。

14. 本文中の「灰白色火山灰」(山田・庄子 1980)は、これまでの仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田a火山灰 (To-a)」と考えられている。降下年代は現在、西暦 915 年と推定されており、本書もこれに従う。
山田一郎・庄子貞雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』

早田 勉 2000 「第 5 章 自然科学分析 第 1 節 沼向遺跡、中野中柳遺跡におけるテフラ分析」『沼向遺跡 第 1 ~ 3 次調査』仙台市文化財調査報告書第 241 集

小口雅史 2003 「古代東北の広域テフラをめぐる問題 -十和田aと白頭山(長白山)を中心に-」『日本律令の展開』吉川弘文館

本文目次

序文

例言

凡例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡周辺の環境	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	2
第3章 調査の方法と経過	2
第1節 調査の方法	2
1. 調査区の設定	2
2. 調査の方法	2
3. 調査の経過	3
第2節 報告書の作成	3
第4章 基本層序	4
第5章 調査の概要と成果	7
第1節 上層検出遺構と出土遺物 VI～XV層	7
1. 土坑	7
2. 溝跡	7
3. ピット	11
第2節 下層検出遺構と出土遺物 XVI層以下	11
1. 竪穴住居跡・竪穴遺構	13
2. 土坑	21
3. 溝跡	27
4. 性格不明遺構	28
第6章 まとめ	30

参考文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 鍛冶屋敷前遺跡の位置と周辺遺跡分布図	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 調査区東壁・南壁・西壁断面図	5
第4図 上層遺構配置図	8
第5図 SK2・3 土坑平面図・断面図	9
第6図 SD1～6・8・9A・B 溝跡断面図	10
第7図 SD9 溝跡出土遺物	11
第8図 下層遺構配置図	12
第9図 SI1 竪穴住居跡平面図(1)	14
第10図 SI1 竪穴住居跡平面図(2)・断面図	15
第11図 SI2 竪穴住居跡平面図	16
第12図 SI2 竪穴住居跡断面図	17
第13図 SI3 竪穴住居跡平面図	18
第14図 SI3 竪穴住居跡断面図	19
第15図 SI4 竪穴住居跡平面図・断面図	19
第16図 SI5 竪穴住居跡平面図・断面図	20
第17図 SI6 竪穴住居跡平面図・断面図	21
第18図 SI7 竪穴遺構平面図・断面図	22
第19図 SI7 竪穴遺構出土遺物	23
第20図 SI8 竪穴遺構平面図・断面図	24
第21図 SI8 竪穴遺構出土遺物	25
第22図 SK1・5～10・13～16 土坑平面図・断面図	26
第23図 SK1 土坑出土遺物	27
第24図 SD7・10～13・15・16 溝跡断面図	29
第25図 SD12・13・16 溝跡出土遺物	29
第26図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図	30
第27図 鍛冶屋敷前遺跡第3次調査出土赤焼土器集成図	31

写真図版目次

写真図版1 調査区全景	33
写真図版2 調査区土層断面・土坑	34
写真図版3 溝跡	35
写真図版4 竪穴住居跡・竪穴遺構(1)	36
写真図版5 竪穴遺構(2)・土坑(1)	37
写真図版6 土坑(2)・溝跡・性格不明遺構	38
写真図版7 出土遺物(1)	39
写真図版8 出土遺物(2)	40

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

仙台市南部の富田富沢地区は、平成25年度から行われている仙台市富沢駅西土地区画整理事業によって、大きく環境が変わってきたいる地域である。区画整理事業の進捗に伴い、供用が始まっている部分では住宅や商業施設などの建設が進んでいる。その中にあって、鍛冶屋敷前遺跡の範囲にある、区画整理地内の仙台市太白区富沢字鍛冶屋敷前地内（富沢駅西土地区画整理地内第51街区第51画地の一部）で開発についての問い合わせがあり、仙台市教育委員会は事業者に埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、区画整理事業による周辺の街路部分での調査結果から、古代の集落跡や鍛冶に関係する施設、中世の館跡にかかわる施設が検出される可能性が高い地域であることから、地下遺構に影響を及ぼす計画の場合は本発掘調査の必要がある旨、回答した。平成29年1月23日付で、事業者である株式会社同事より、当該地区での事務所付共同住宅新築工事について、埋蔵文化財の取り扱いについての協議書が提出された。仙台市教育委員会では、建築計画が地下遺構を損なう計画であることから、建築範囲を対象とした本発掘調査の必要があるとした回答を行った。その後、本発掘調査の実施について協議を行い、平成29年5月中旬より発掘調査を実施することとした。

第2節 調査要項

調査要項

遺跡名：鍛冶屋敷前遺跡（宮城県遺跡登録番号 01511）

所在地：宮城県仙台市太白区富沢字鍛冶屋敷前16外

調査原因：事務所付共同住宅新築工事

調査面積：758m²

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

調査指導係主任 工藤信一郎 主事 高橋純平 専門員 主演光朗

調査組織：国際文化財株式会社

調査員 江藤 敦 調査補助員 伊藤裕基 計測員 諸熊和彦 計測補助員 庄子輝男

調査期間：平成29年5月19日～平成29年8月29日

整理期間：平成29年9月4日～ 平成30年3月23日

第2章 遺跡周辺の環境

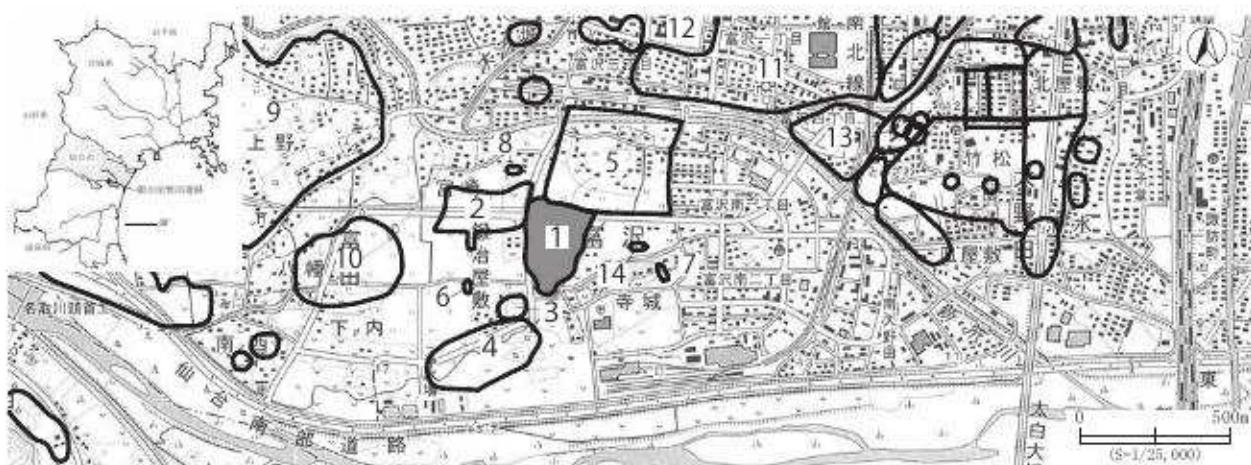
第1節 遺跡の位置と地理的環境

鍛冶屋敷前遺跡は、地下鉄南北線富沢駅より西約1kmの地点、仙台市太白区富沢字鍛冶屋敷前に位置する。遺跡の所在する富田富沢地区は郡山低地南西端部に位置し、南側に名取川、北側に名取川の支流である笊川が曲流しており、名取川と笊川による旧河道、自然堤防と後背湿地が広がっている。改修以前の笊川は流路を変じつつ頻繁に氾濫を繰り返していたことが知られている。今回の調査区は自然堤防上に立地し、地表面の標高は16.1～16.8mである。区画整理事業以前の土地利用は、畑・水田である。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

本調査区は、平成26年度に仙台市富沢駅西土地区画整理事業に伴い発掘調査が行われた鍛冶屋敷前遺跡第2次調査I区とII区の間に位置する(第2図)。鍛冶屋敷前遺跡周辺には鍛冶屋敷A遺跡、鍛冶屋敷B遺跡、富沢館跡、京ノ中遺跡、川前遺跡等がある。これらの遺跡からは縄文時代～近世の遺構・遺物が多数確認されている(第1図)。当地区及び周辺の歴史的環境の詳細については『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか一仙台市富沢駅西土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書』(仙台市教委 2018)を参照されたい。

当調査区の北側に位置するI区からは平安時代の竪穴住居跡、土坑、溝跡、ピットが検出され、南側に位置するII区からは平安時代の竪穴住居跡、鍛冶工房跡、土坑、溝跡、ピットが密集して検出されている。今回の調査でも同時期の竪穴住居跡、土坑、溝跡、ピットが検出された。郡山低地南西端部とその周辺地域では近年開発が進み多くの調査が行われており、旧石器時代から近世まで連綿と人々の生活が営まれていたことが明らかになっている。



番号	遺跡名稱	立地	種別	時代
1	鍛冶屋敷前遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・奈良～中世
2	鍛冶屋敷A遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・奈良～中世
3	鍛冶屋敷B遺跡	自然堤防・後背湿地	集落跡	縄文・奈良～近世
4	六本松遺跡	自然堤防	集落跡	平安
5	富沢館跡	自然堤防	施設跡・集落跡	縄文・平安～近世
6	京ノ中遺跡	自然堤防	集落跡	平安
7	川前遺跡	自然堤防	集落跡	縄文(後・晩)
8	官崎遺跡	自然堤防	集落跡	平安
番号	遺跡名稱	立地	種別	時代
9	上野遺跡	丘陵	集落跡	縄文・奈良・平安・近世
10	南ノ東遺跡	自然堤防	散布地	弥生・平安
11	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	集落跡・水田	縄文・近世
12	富沢遺跡	後背湿地	水田跡・蓮池地	旧石器～近世
13	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡・墓・埋跡	縄文・弥生・奈良～近世
14	川前遺跡	自然堤防	散布地	縄文初期・古代

第1図 鍛冶屋敷前遺跡の位置と周辺遺跡分布図

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

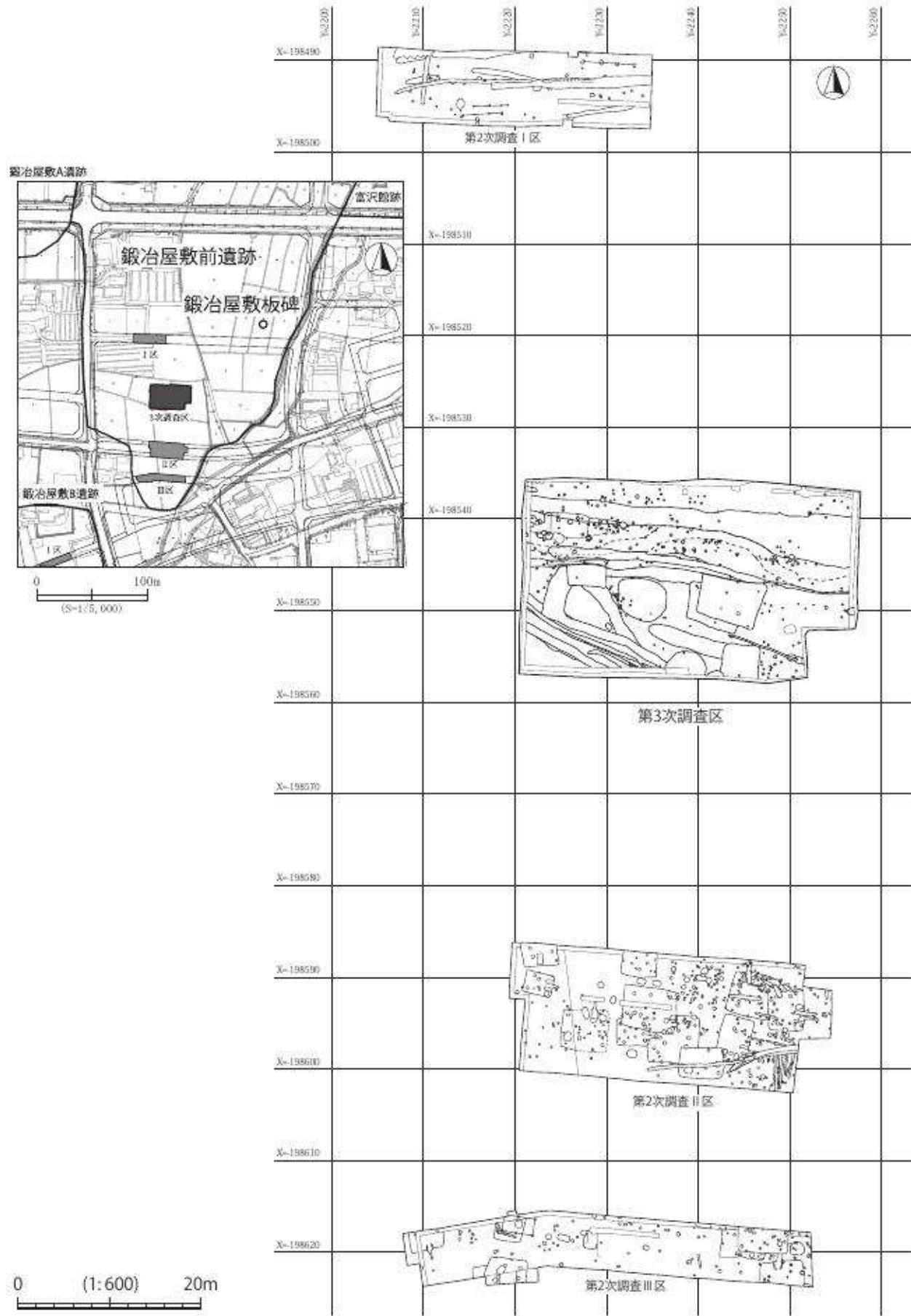
1. 調査区の設定

調査区は、建築計画範囲を対象とした東西37m、南北22mの範囲に、事業者と仙台市教育委員会の協議により758m²の調査区が設定された。

2. 調査の方法

重機掘削は事前に仙台市教育委員会職員の立会のもとに調査区南西部ではIV層上面まで、その他はXIII層上面まで行われ、掘削土は場外搬出および敷地内に仮置きした。IV～XVII層上面までの遺構検出と精査は人力で行った。

作図はトータルステーションによる機械測量を主体に三次元(x, y, z)座標の記録をとり、土層断面図は写真実



測を行った。写真撮影は 35mm のカラーリバーサル、モノクロネガとデジタルカメラを併用した。

事業者との協議により、調査終了後の埋め戻し作業は行わなかった。

3. 調査の経過

5月8日から5月18日まで重機を使用して、表土掘削を行った。その後19日から基準点と水準点の測量を行い、22日からIV層～XVII層上面までの遺構検出と精査を人力にて行った。5月30日から6月2日にかけて、調査区壁沿いに土層堆積状況及び遺構面確認を兼ねたトレーンチ掘削を行い、遺構面を確認した後、各遺構の調査を行った。8月25日にドローンによる空中写真撮影を行い、8月29日に調査を終了した。

第2節 報告書の作成

国際文化財株式会社東北支店において、出土遺物、遺構図面の整理作業を行った。基礎整理作業終了後、報告書作成のため出土遺物の登録・実測図作製・写真撮影を行い、個別遺構図を作製した。その後、遺構・遺物図版の作製、原稿執筆、編集作業を行った。整理・報告書作成中は必要に応じて教育委員会と作業内容の確認・協議を行った。土師器・土製品・石器の実測図・トレース図については、教育委員会職員が仙台市野村埋蔵文化財整理収蔵室において点検を行った。

第4章 基本層序

今回の調査区は平成26年度の第2次調査I・II区の間に位置するが、今回の調査においては遺構面が多く観察されたため平成26年度の調査と整合性はとっていない。調査区の北側を除く東西壁際と南壁の一部に幅0.5mの排水を兼ねた土層観察用のトレーンチを設け、現表土から下層までの堆積状況を確認した。その結果、本調査区における基本層序は18層に分層されたが、調査区東側と西側では堆積状況が大きく異なっていることが判明した。IV層から遺構検出作業を開始したが、壁面と重複関係等からVI～XV層までの遺構を上層検出遺構とし、XVI～XVII層の遺構を下層検出遺構として報告する。尚、平成26年度調査においては礫層まで確認しているが、今回の調査では最深部が現表土より2mを超える可能性があり、安全を考慮して掘削を行わなかった。

本章では今回の調査において確認した基本層序I～XVII層について個別に報告する。

I層：調査区の全面で確認された。区画整理に伴う盛土・整地層である。層厚は0.7～1.0mである。

II層：調査区の東から中央で確認された。標高は15.78～15.57mで、10YR5/1褐灰色シルトを基調とし、東側から中央に広がる現代の水田耕作土である。下面是起伏する。層厚は0.05～0.2mである。

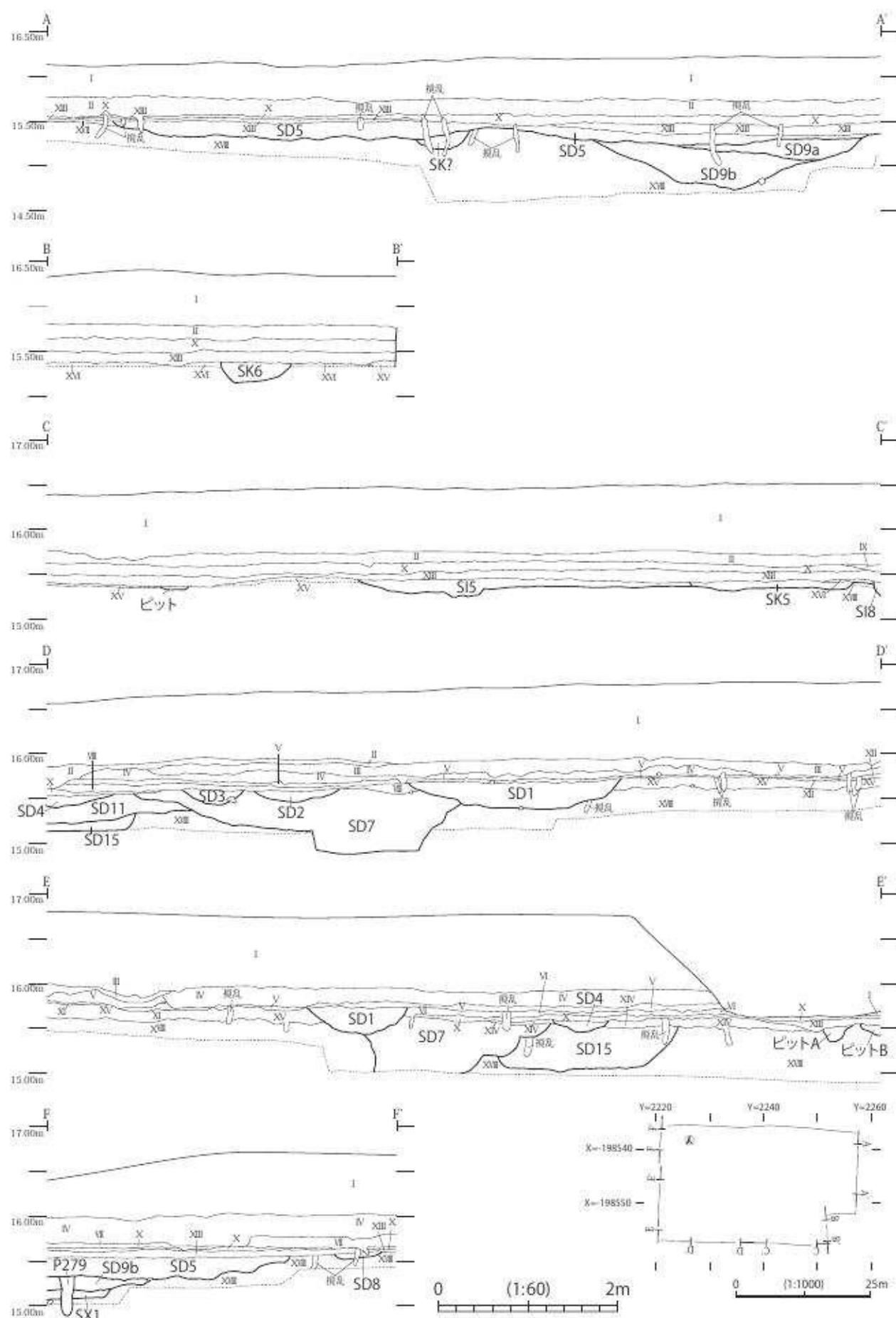
III層：調査区中央から南西側で確認された。標高は16.04～15.75mで、10YR4/1褐灰色シルトを基調とし、酸化鉄を多く含む現代の水田耕作土である。下面是起伏する。層厚は0.1～0.25mである。

IV層：調査区南西側を中心に確認された。標高は16.03～15.72mで、10YR4/2灰黄褐色シルトを基調とし、極細砂と酸化鉄を多く含む。下面是起伏する。層厚は0.2m前後である。

V層：調査区中央から南西側にかけて確認された。標高は15.75～15.63mで、10YR5/6黄褐色シルトを基調とする酸化鉄層である。下面是やや起伏するが、ほぼ平坦である。層厚は0.05～0.2mである。

VI層：調査区中央から南西側の狭い範囲で一段高い範囲で確認された。標高は15.72～15.65mで、10YR4/1褐灰色シルトを基調とする。下面是緩やかに起伏する。調査区南西側で、本層の上面においてSD1溝跡を検出した。層厚は0.1m前後である。

VII層：調査区北西側の狭い範囲で確認された。標高は15.80～15.66mで、10YR4/6褐色シルトを基調とする。



第3図 調査区東壁・南壁・西壁断面図

下面是ほぼ平坦である。層厚は0.1m前後である。

VII層：調査区南側中央の狭い範囲で確認された。標高は15.63～15.58mで、10YR3/2 黒褐色シルトを基調とし、酸化鉄を中量含む。下面是ほぼ平坦である。上面で、SD2・3溝跡を検出した。層厚は0.1m前後である。

IX層：調査区南側中央の狭い範囲で確認された。標高は15.60～15.52mで、10YR5/1 褐灰色シルトを基調とする。X層由来のブロックを含む。下面是平坦である。層厚は0.1m前後である。

X層：調査区全面で確認された。標高は15.64～15.50mで、10YR5/6 黄褐色シルトを基調とし、酸化鉄を多く含む。下面是平坦である。上面で、SD4・5溝跡を検出した。層厚は0.05～0.15mである。

XI層：調査区南西側の狭い範囲で確認された。標高は15.84～15.70mで、10YR3/2 黒褐色シルトを基調とする。マンガン粒、酸化鉄を少量含む。下面是起伏する。層厚は0.1m前後である。

XII層：調査区中央南側の非常に狭い範囲で確認された。標高は15.78～15.72mで、10YR2/3 黒褐色シルトを基調とする。下面是平坦である。層厚は0.05m前後である。

XIII層：調査区全面で確認された。標高は15.63～15.40mで、10YR3/3 暗褐色シルトを基調とする。炭化物粒とマンガン粒を微量含む。下面是ほぼ平坦である。層厚は0.05～0.15mである。

XIV層：調査区西側の極狭い範囲で確認された。標高は15.59～15.50mで、10YR2/1 黒色シルトを基調とする。マンガン粒を含む。下面是平坦である。層厚は0.1m前後である。

XV層：調査区中央南側の狭い範囲で確認された。標高は15.70～15.60mで、10YR3/3 暗褐色シルトを基調とする。炭化物とマンガン粒を含み遺物片も多数混じる。下面是平坦である。層厚は0.05～0.2mである。

XVI層：調査区中央東側の狭い範囲で確認された。標高は15.44～15.38mで、10YR2/3 黒褐色シルトを基調とする。灰白色火山灰が南東側と中央南側に薄く堆積しており、炭化物粒、径5～15mmのXIV層由来のブロックを含む。下面是平坦である。上面で、SI8 竪穴遺構・SK5 土坑を検出した。層厚は0.05m前後である。

XVII層：調査区東側で確認された。標高は15.40～15.38mで、10YR2/2 黒褐色シルトを基調とする。炭化物とマンガン粒を微量含む。下面是平坦である。調査区南東側で、本層の上面において、SI5 竪穴住居跡を検出した。層厚は0.1m前後である。

XVIII層：調査区全域で確認された。標高は15.62～15.38mで、10YR4/6 褐色シルトを基調とする。上面においてSK1・6 土坑をはじめとする多数の遺構を検出した。層厚は0.8m以上である。

第5章 調査の概要と成果

本章では、本調査によって検出した遺構、遺物について報告する。検出した遺構は、新旧関係、堆積状況、調査区壁面の観察、出土遺物からVI～XV層で検出した上層検出遺構とXVI～XVII層で検出した下層検出遺構に区分した。上層検出遺構には土坑、溝跡、ピットがある。下層検出遺構には竪穴住居跡・竪穴遺構、土坑、溝跡、性格不明遺構がある。各遺構は個別報告を基本とするが、ピットに関しては一括記載とする。

第1節 上層検出遺構と出土遺物 VI～XV層

本節では基本層VI～XV層の各面で検出した遺構および遺物について報告する。該当する遺構は、土坑2基、溝跡9条、ピット279基である。なお、遺構の重複関係の記述については、ピットを省略している（第4図）。

1. 土坑（第5図）

調査区北西側に位置しSD5の直下で2基検出した。ピット群の中に位置し、これらより新しい。遺物は土師器が出土しているが、いずれも堆積土からの細片である。

SK2 土坑（第5図） 調査区北西側に位置する。SD5・9と重複関係にあり、SD5より古く、SD9より新しい。平面形は楕円形で、長軸方位はN-60°-Wである。規模は長軸0.78m、短軸0.67m、深さ0.38mである。断面形は逆台形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は起伏する。堆積土は5層に分層された。1～3層は黒褐色シルトを主体として炭化物・XVII層を由来とする径2～3mmの粒を多く含む。4・5層は褐色シルトを主体とする。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK3 土坑（第5図） 調査区北西側に位置する。SD5・9と重複関係にあり、SD5より古く、SD9より新しい。平面形は楕円形で、長軸方位はN-7°-Eである。規模は長軸0.56m、短軸0.47m、深さ0.12mである。上部はSD5によって削平を受け底面付近のみ残存するが、断面形は逆台形と考えられる。壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。黒褐色粘土質シルトを主体とする。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

2. 溝跡（第4・6・7図）

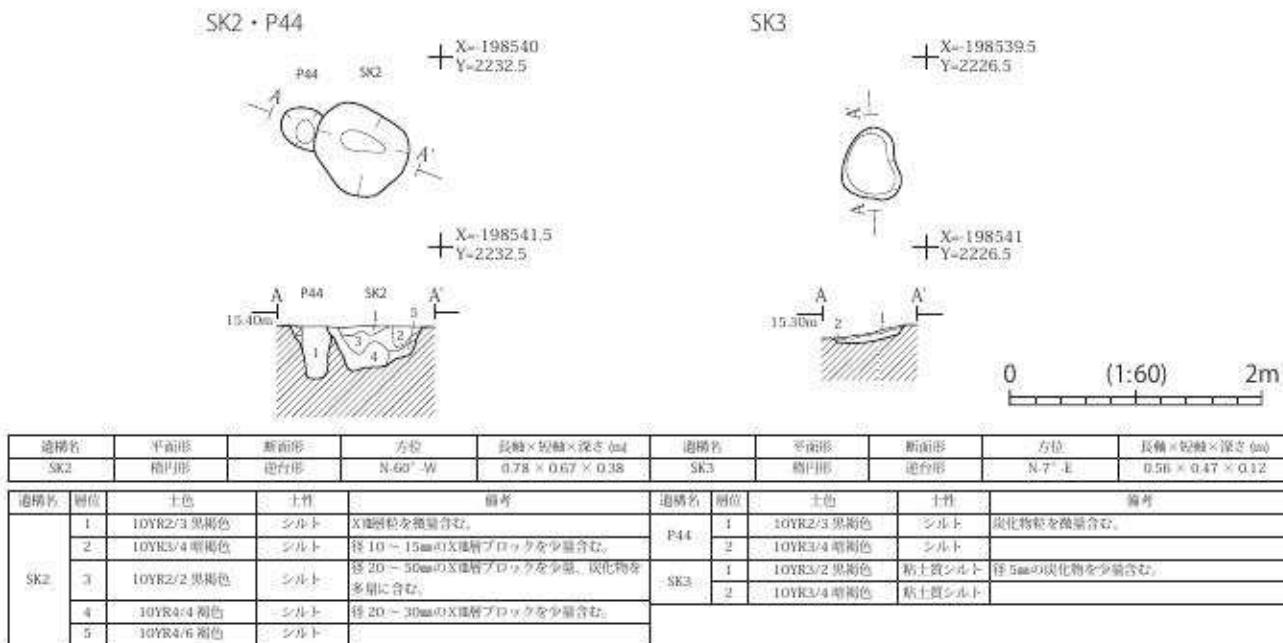
調査区全体で9条検出した。これらの溝跡は、新旧関係、方向、調査区壁面の観察から上層遺構と判断した。溝跡の堆積土には、酸化鉄・マンガン粒を多く含むものがあり、堆積状況から自然堆積土と考えられる。遺物は、土師器、須恵器、瓦、石器、金属製品、土製品、鉱滓、礫が出土しているが、いずれも堆積土からである。そのうちSD9A・B溝跡から出土した5点の遺物を図示し、6点の写真を掲載した。

SD1 溝跡（第4・6図） 調査区南西側で北西から南東にかけてVI層上面で検出した。両端は調査区外へと延びる。溝方向はN-60°-Wで、規模は長さ12.5m、上幅1.05m、下幅0.45m、深さ0.27mである。断面形はU字形で、堆積土は単層で灰黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は土師器片と須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD2 溝跡（第4・6図） 調査区南西側で北西から南東にかけてVIII層上面で検出した。西端は調査区内で収束し、南端は調査区外へと延びる。溝方向はN-64°-Wで、規模は長さ6.5m、上幅0.5m、下幅0.15m、深さ0.11mである。断面形はU字形で、堆積土は単層で黒褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

第4図 上層遮構配図





第5図 SK2・3 土坑平面図・断面図

SD3溝跡(第4・6図) 調査区南西側で北西から南東にかけてⅧ層上面で検出した。西端は調査区内で収束し、南端は調査区外へと延びる。溝方向はN-63°-Wで、規模は長さ3.5m、上幅0.2m、下幅0.1m、深さ0.16mである。断面形はU字形で、堆積土は単層で黒褐色シルトを基調とする。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD4溝跡(第4・6図) 調査区南西側で北西から南東にかけてX層上面で検出した。溝は直線で南側の一部が途切れるが、両端は調査区外へと延びる。溝方向はN-64°-Wで、規模は長さ18.4m、上幅0.3m、下幅0.2m、深さ0.05mである。断面形は逆台形で、堆積土は単層で黒褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は土師器片、須恵器片、鉱滓が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD5溝跡(第4・6図) 調査区北側で東西方向にかけてX層上面で検出した。SD6・9と重複関係にあり、SD6より古く、SD9より新しい。両端は調査区外へと延びる。溝方向はN-85°-Wで、規模は長さ37m、上幅8.6m、下幅6.5m、深さ0.22mである。断面形は逆台形で、堆積土は3層に分層された。1・2層は黒褐色シルトを基調とし、マンガン粒・酸化鉄を含む。3層は暗褐色シルトに黒褐色シルトが混入している。遺物は土師器片、須恵器片、金属製品・鉱滓が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD6溝跡(第4・6図) 調査区中央で東西方向にかけてX層上面で検出した。SD5・9と重複関係にあり、本遺構が最も新しい。両端ともに調査区内で収束する。溝方向はN-80°-Wで、規模は長さ23.88m、上幅0.9m、下幅0.54mで、深さは東側0.3m、西側0.54mである。東側が浅く西側で深くなっている。断面形はU字形で、堆積土は3層に分層された。1層は褐色シルトに黒褐色シルトが混入しており、炭化物を微量含む。2層は黒褐色シルトを基調とし、炭化物・XⅢ層由来の径2~5mmの粒を含む。3層は灰黄褐色シルトを基調とし、黒褐色シルトが少量混入している。遺物は土師器片、金属製品が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD8溝跡(第4・6図) 調査区北西側のXⅢ層上面で検出した。西端は調査区外へ延びる。溝方向はN-78°-Wで、規模は長さ1.5m、上幅0.5m、下幅0.45m、深さ0.05mである。断面形は皿形で、堆積土は単層で暗褐色シルトを基調とする。遺物は出土していない。

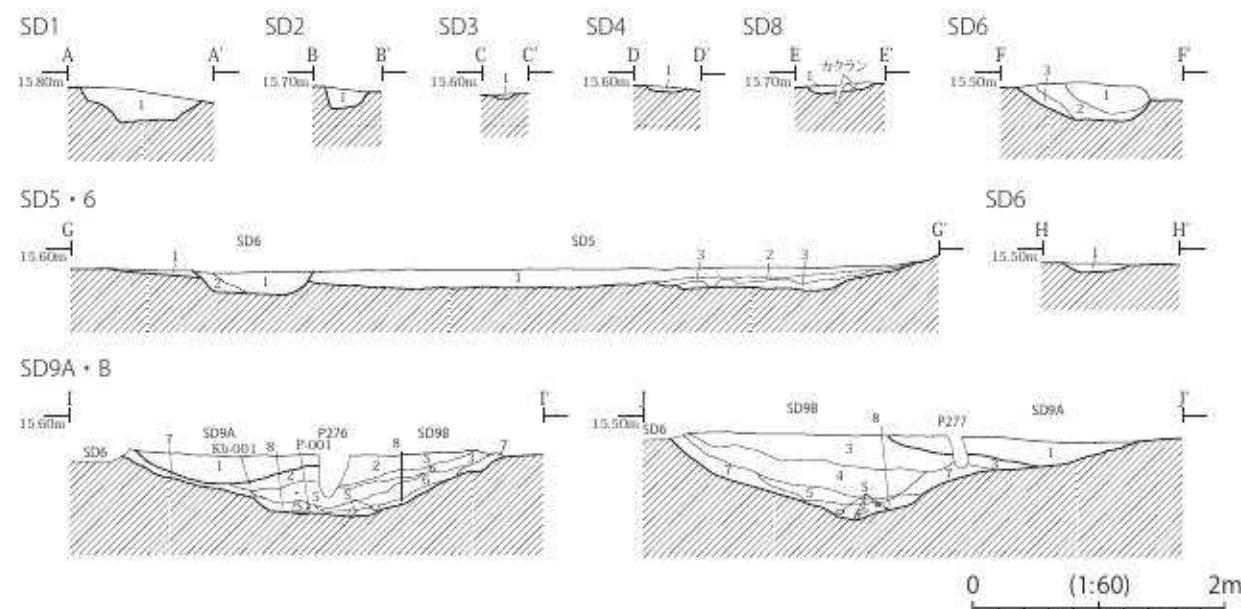
SD9溝跡(第4・6・7図) 調査区北側のSD5の直下で検出した。本遺構は1条の溝跡として調査を行ったが、調査終了時に断面の堆積状況を再検討した結果、重複した2条の溝跡であると判断された。よって出土遺物の時

期も細別できなかった。

SD9A 溝跡 (第4・6・7図) 調査区北側に位置する。SK2・3、SD5・6・9Bと重複関係にあり、SK2・3、SD5・6より古く、SD9Bより新しい。両端は調査区外へと延びる。溝方向はN-82°-Wで、蛇行しながら東西方向に延びている。規模は長さ37m、上幅1.98m、下幅0.6m、深さ0.22mである。断面形は皿形で、堆積土は単層で黒褐色シルトを基調とする。

SD9B 溝跡 (第4・6・7図) 調査区北側に位置する。SK2・3、SD5・6・9Aと重複関係にあり、本遺構が最も古い。両端は調査区外へと延びる。溝方向はN-82°-Wで、規模は長さ37m、上幅2.96～5.8m、下幅0.94～1.2m、深さ0.48mである。断面形は逆台形で、堆積土は7層に分層された。2・3層は黒褐色シルトを主体とし、炭化物・焼土粒を含む。4～6層は黒褐色砂質シルトを主体とし、炭化物・焼土ブロックを多量に含む。7・8層は暗褐色砂質シルトを主体とする。底面全体に0.1～0.4m前後の自然礫が検出された。遺物は土師器片、須恵器片、瓦片、土製品、石器、金属製品、椀形溝などの鉱滓が出土している。このうち土製品(第7図1・2)2点、剥片石器(第7図3)1点、磨製石斧(第7図4)1点、石製品(第7図5)1点を図示し、椀形溝などの鉱滓6点(写真図版8～10)の写真を掲載した。

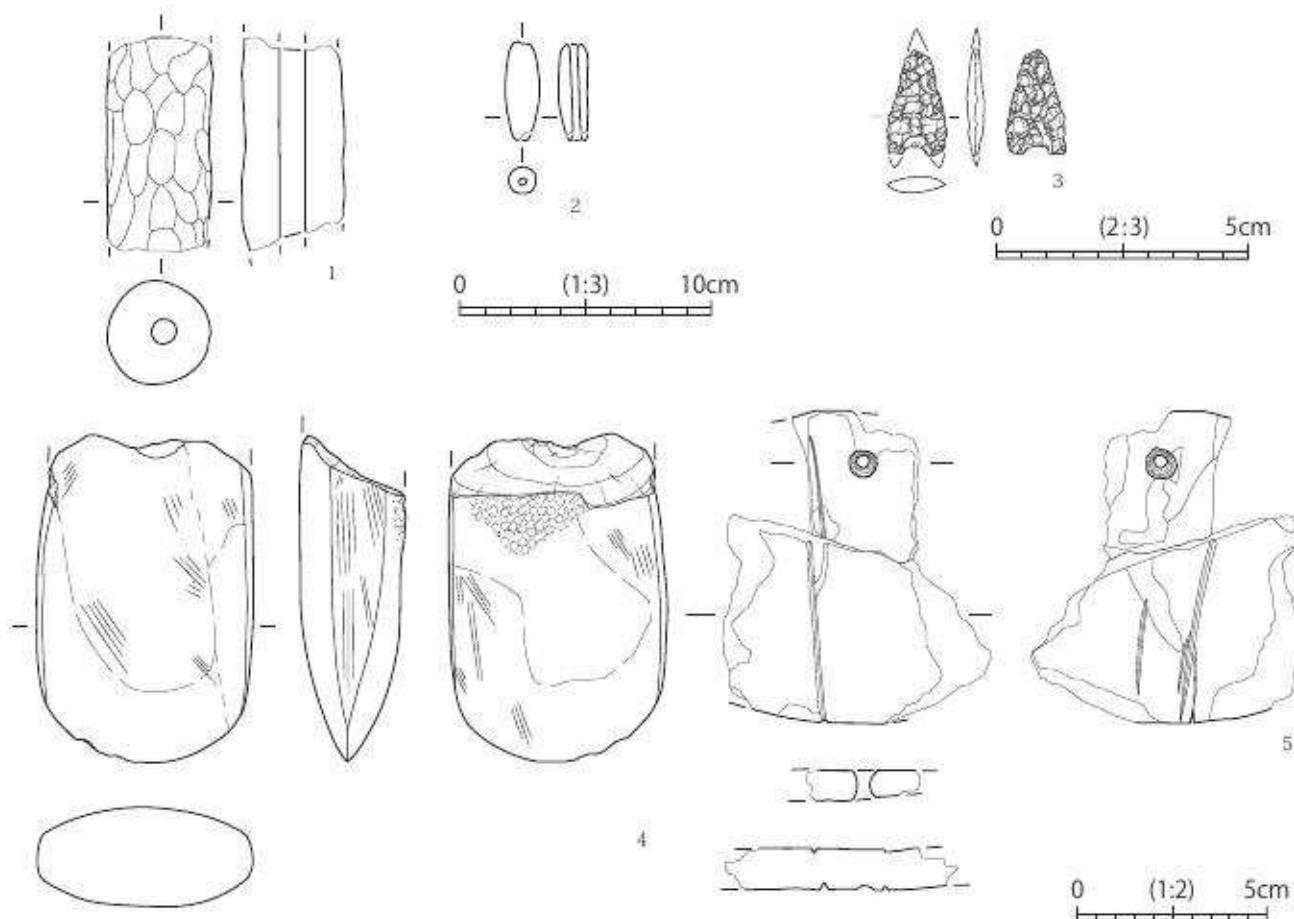
第7図1・2はいずれも管状土錐である。3は凹基石鍬である。側縁からの押圧剥離で整形された後、器軸に対し平行方向の剥離が加えられている。先端部と基礎部が欠損しており、衝撃剥離の可能性がある。4は磨製石斧で



遺構名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ(m)	遺構名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ(m)
SD1	直線	U字形	N-60°-W	(12.50) × 1.05 × 0.27	SD6	直線	U字形	N-80°-W	23.88 × 0.90 × 0.30
SD2	直線	U字形	N-64°-W	16.50) × 0.50 × 0.11	SD8	直線	皿形	N-78°-W	(1.50) × 0.50 × 0.05
SD3	直線	U字形	N-63°-W	13.50) × 0.20 × 0.16	SD9A	蛇行	皿形	N-82°-W	(37.00) × 1.98 × 0.22
SD4	直線	逆台形	N-64°-W	(18.40) × 0.30 × 0.05	SD9B	直線	逆台形	N-82°-W	(37.00) × 5.80 × 0.48
SD5	曲線	逆台形	N-85°-W	(37.00) × 0.60 × 0.22					

遺構名	層位	土色	土性	備考	遺構名	層位	土色	土性	備考
SD1	1	10YR4/2 淡黄褐色	砂質シルト	鉄化鉄を多量に含む。	SD8	1	10YR3/3 嗜褐色	シルト	マンガン粒を多層に含む。
SD2	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒を微量、鐵化鉄を含む。	SD9A	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR3/4 黑褐色シルトの互層。炭化物を微量含む。
SD3	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	マンガン粒と径5～20mmの焼土ブロックを少層含む。	2	10YR2/3 黑褐色	シルト	炭化物・燒土粒を微量、上部にマンガン粒を少層含む。	
SD4	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒・鐵化鉄を少量含む。	3	10YR2/3 黑褐色	砂質シルト		
	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	マンガン粒を多量、鐵化鉄を含む。	4	10YR3/4 嗜褐色	シルト	径1～5mmの燒土ブロック・炭化物を微量含む。	
SD5	2	10YR2/3 黑褐色	シルト	10YR2/2 黑褐色シルトが侵入している。	5	10YR3/3 嗜褐色	砂質シルト		
	3	10YR2/4 嗜褐色	シルト	10YR2/3 黑褐色シルトが侵入している。炭化物を微量含む。	6	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	炭化物・燒土粒を多量に含む。	
SD6	1	10YR4/6 灰色	シルト	10YR2/3 黑褐色シルトが侵入している。炭化物を微量含む。	7	10YR3/4 嗜褐色	粘土質シルト		
	2	10YR2/2 黑褐色	シルト	炭化物・X線の粒を微量含む。	8	10YR3/2 黑褐色	砂質シルト	土層、土製品が含まれている。	
	3	10YR4/2 淡黄褐色	シルト	10YR2/2 黑褐色シルトが侵入している。					

第6図 SD1～6・8・9A・9B溝跡断面図



第7図 SD9溝跡出土遺物

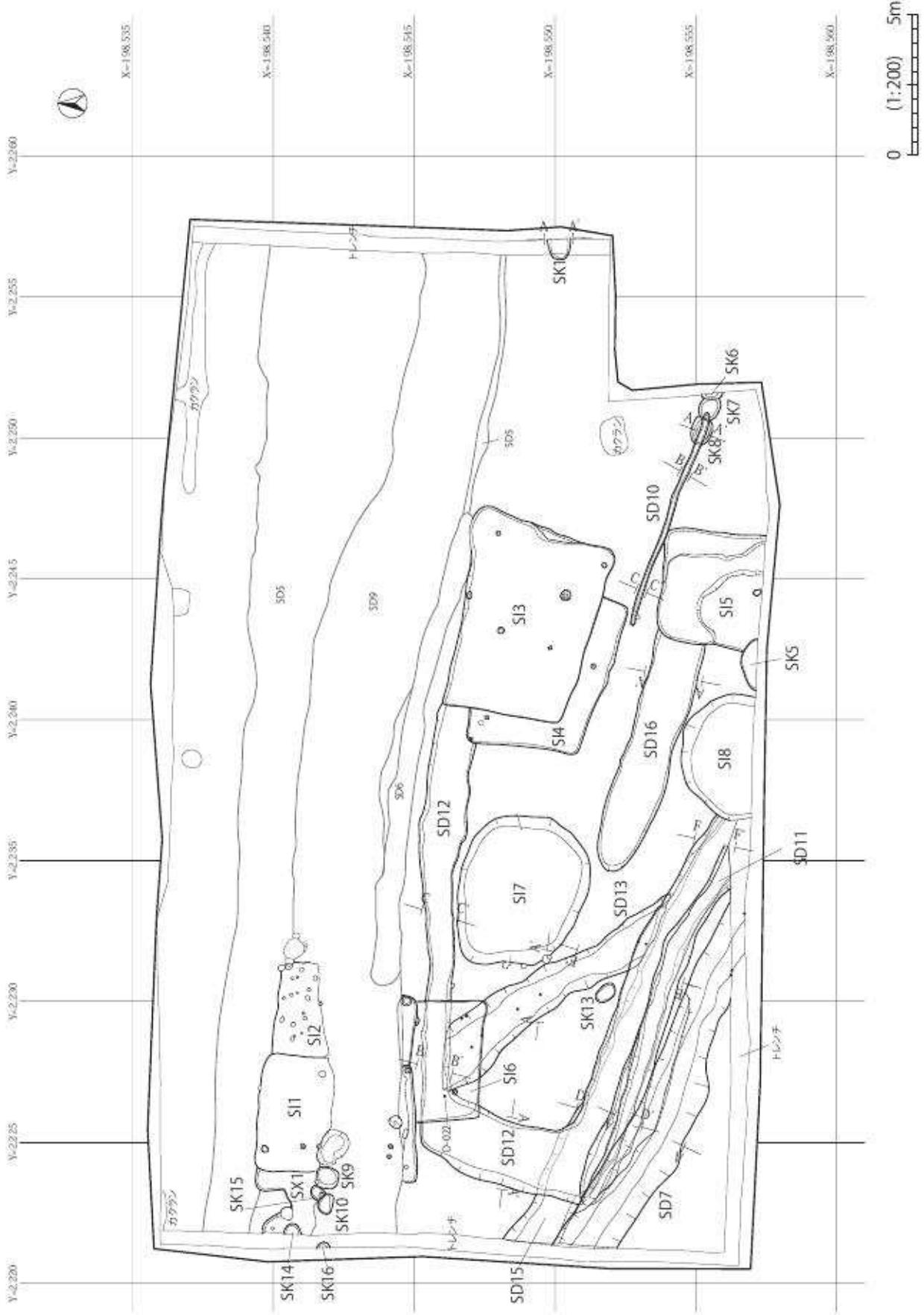
ある。上半部が欠損しており、中央付近から長軸方位に対し直交方向の力で折れている。器面全体に研磨が施されているが、一部に敲打痕を残す。刃部周辺は入念に研磨されている。5は有孔の石製品である。表面・裏面に深く直線的な刻線が施されている。周縁の大部分を欠損している。一部には刻線に沿って折り取られたとみられる痕跡が確認される。

3. ピット(第4図)

調査区のほぼ全域で、279基をXIII-XV層の各上面で検出した。ピットの大半が直径0.2~0.5m、深さ0.04~0.48mと比較的小型であるが、深いピットも確認できる。堆積土は炭化物・XVII層由来のブロックを含む単層のピットが多い。ピットの多くは建物跡になるような配置は確認できないが、一部には柱痕跡が確認されている。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

第2節 下層検出遺構と出土遺物 XVI層以下

本節では基本層XVI層以下の各面で検出された遺構および遺構内出土遺物について報告する。該当する遺構は、竪穴住居跡6軒、竪穴遺構2基、土坑11基、溝跡7条、性格不明遺構1基である。なお、遺構の重複関係の記



第8図 下層遺構配置図

述については、ピットを省略している(第8図)。

1. 竪穴住居跡・竪穴遺構(第9～21図)

平成26年度の調査においてI区からは竪穴住居跡煙道先端部を、II区からは竪穴住居跡・工房跡を複数検出している。本調査区はI・II区に挟まれるため竪穴住居跡・工房跡の検出を想定していたが、検出された竪穴住居跡は上層遺構や耕作によって削平を受け残存状況は不良である。調査区全体で竪穴住居跡6軒、竪穴遺構2基を検出した。調査区北東部を除く中央と西側にかけて分布する。住居跡にはカマド・炉等の床面施設は確認されず、主に柱穴と掘り方が検出されるだけであった。

遺物は全ての竪穴住居跡・竪穴遺構から縄文土器片、土師器、赤焼土器、須恵器片、瓦片、石器、金属製品、椀形溝などの鉱滓、粘土塊等が出土している。このうち縄文土器片、瓦片は、住居廃絶後の廃棄ないし混入と考えられる。当該遺構の時期は土師器、赤焼土器を基に判断した。以上のことから考えられる竪穴住居跡・竪穴遺構の時期は、10世紀前半の竪穴遺構2基、詳細時期不明が6軒である。

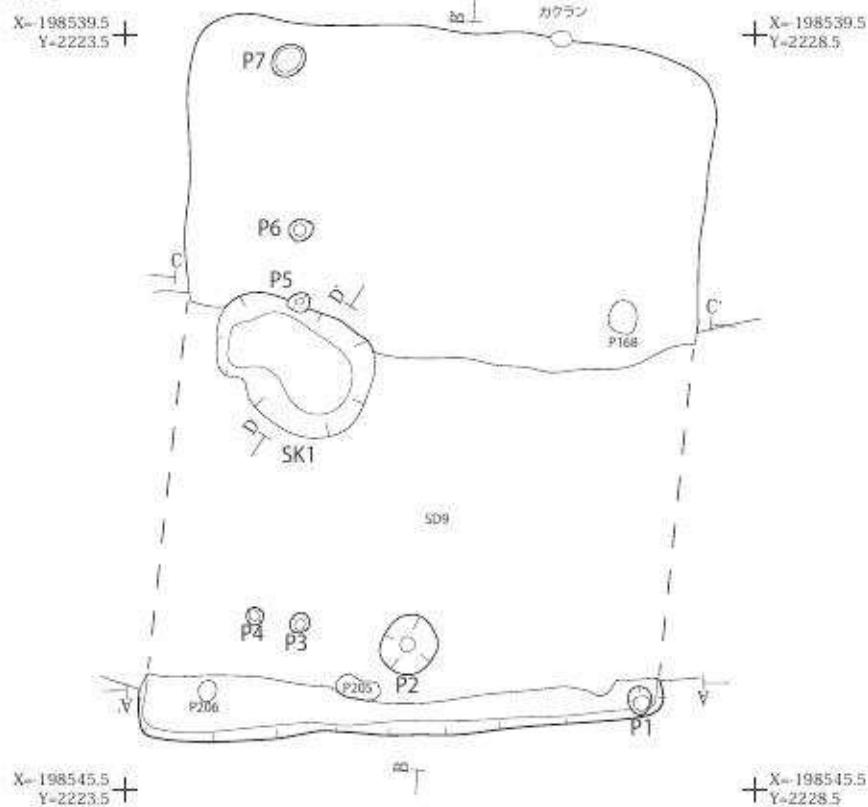
SI1 竪穴住居跡(第9・10図) 調査区西側に位置し、XVII層上面で検出した。SI2・6、SK3、SD5・9、SX1と重複関係にあり、SK3、SD5・9より古く、SI2・6、SX1より新しい。上面はほとんど削平され掘り方のみ検出されたが、南壁の一部にわずかに床面が残存している。規模は南北5.6m、東西4mで、平面形は隅丸方形である。方位は南辺を基準としてN-4°-Eである。堆積土は南側でわずかに残存しており、5層に分層された。1～4層は住居堆積土で、5層は掘り方埋土である。住居堆積土は黒褐色シルトを基調とし炭化物・焼土粒を含む。床面付近は暗褐色粘土質シルトを基調とする。掘り方埋土は暗褐色シルトを基調とし、黒褐色シルトブロックを含む。壁面は南側にしか残存していないが直線的に外傾して立ち上がる。床面からの高さは0.2mである。床面は掘り方を5～10cm埋め戻して構築している。残存している南側の床面はほぼ平坦であるが、やや浅い窪みが検出された。掘り方は深さ0.15mで、全面が掘り込まれている。ピットは床面で1基、SD9底面で3基、掘り方検出時に3基を検出した。柱痕跡は確認されなかった。ピットの平面形は円形が主であるが、一部不整楕円形のものがある。断面形は逆台形で、規模は長軸0.14～0.48m、短軸0.14～0.42m、深さ0.08～0.24mである。カマドは検出されなかつた。その他の施設では、土坑1基を検出した。SK1は西壁際中央付近に掘り込まれている。平面形は梢円形で、規模は長軸1.32m、短軸0.96m、深さ0.28mである。検出面で炭化物と焼土ブロックが集中しているのが確認され、間層を挟み層をなしている。カマドは検出されなかつたが、SK1はカマドに付随する施設(廃棄土坑)の可能性が考えられる。

遺物は住居跡堆積土、P1、掘り方から土師器片と椀形溝が出土しているが、図示できる遺物はない。椀形溝(写真図版8-11)1点を写真のみ掲載した。出土した土師器が細片であり時期を決定できる遺物がないため、詳細な年代は不明である。

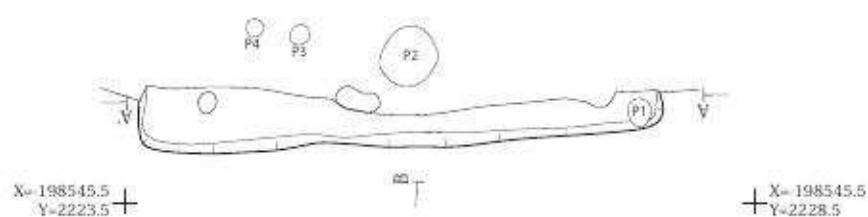
SI2 竪穴住居跡(第11・12図) SI1 竪穴住居跡の東側に位置し、XVII層上面で検出した。SI1・6、SD5・9と重複関係にあり、SI1、SD5・9より古く、SI6より新しい。上面はほとんど削平され掘り方のみ検出されたが、南壁際の一部にわずかに床面が残存している。規模は南北4.9m、東西3.3mで、平面形は隅丸方形である。方位は南辺を基準としてN-10°-Eである。堆積土は南側でわずかに残存しており、5層に分層された。1～4層は住居堆積土、5層は掘り方埋土である。住居堆積土は黒褐色シルトを基調とし、炭化物・焼土ブロックを含む。掘り方埋土は暗褐色シルトを基調とする。壁面は直線的に外傾して立ち上がる。床面からの高さは0.14mである。床面は掘り方埋土上面及び基本層XVII層上面である。残存している南側の床面はほぼ平坦である。掘り方は深さ0.2mで南東部一部を除き全面に掘り込まれる。ピットは床面で1基検出した。柱痕跡は確認されなかつた。平面形は円形で、断面形は皿形である。規模は径0.3m、深さ0.08mである。カマドやその他の施設は検出されなかつた。

遺物は住居跡堆積土と掘り方埋土から土師器片が出土しているが、図示できる遺物はないため、詳細な年代は不

床面

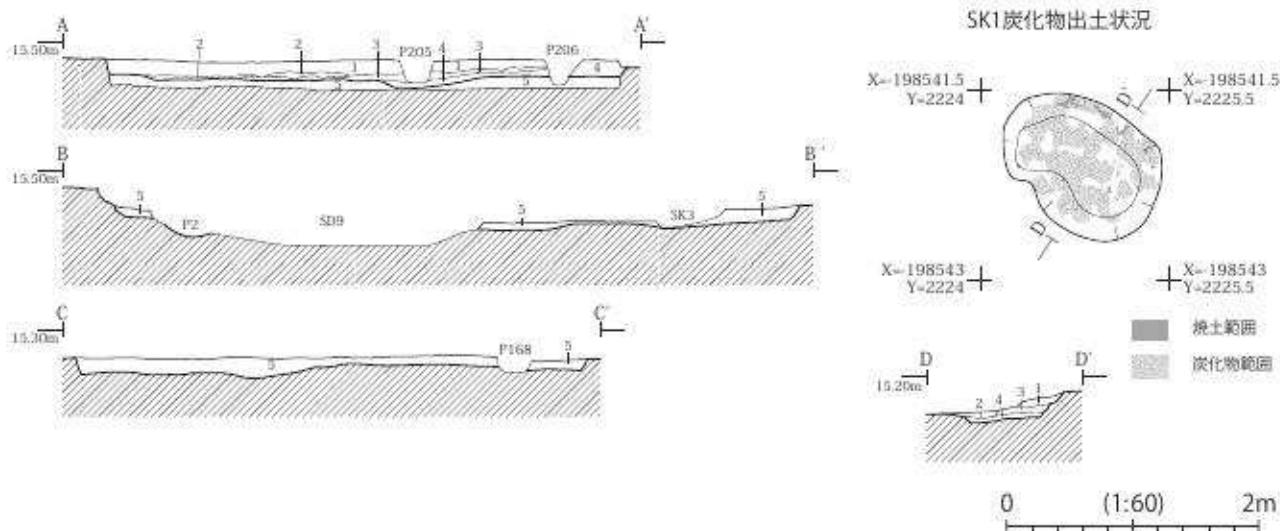


掘り方



0 (1:60) 2m

第9図 SII 整穴住居跡平面図(1)



遺構名	カマド	平面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)			
				(5.60) × (4.00) × 0.20			
P番号	平窓形	断面形	長軸×短軸×深さ (m)	P・SK番号	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ (m)
P1	不整楕円形	逆台形	0.24 × 0.18 × 0.21	P5	不整楕円形	逆台形	0.19 × 0.16 × 0.14
P2	不整円形	逆台形	0.48 × 0.42 × 0.24	P6	円形	逆台形	0.18 × 0.16 × 0.17
P3	円形	逆台形	0.17 × 0.15 × 0.15	P7	椭円形	直形	0.28 × 0.24 × 0.08
P4	円形	逆台形	0.14 × 0.14 × 0.12	SK1	椭円形	U字形	1.32 × 0.96 × 0.28

遺構名	層位	土色	土性	備考	遺構名	層位	土色	土性	備考
SI1	1	10YR2/2 黒褐色	シルト		SK1	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	2	10YR3/3 黒褐色	シルト	焼土粒・炭化物跡を微量含む。		2	10YR2/2 黒褐色	シルト	
	3	10YR4/3 ないし 黄褐色	シルト			3	10YR2/3 黒褐色	シルト	直形
	4	10YR3/4 黒褐色	粘土質シルト			4	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物跡
	5	10YR3/4 黑褐色	シルト	径 5 ~ 10mm の 10YR2/3 黒褐色シルトブロックを微量含む。					径 5mm の焼土ブロックを少量、炭化物を多量に含む。
P1	1	10YR2/1 黑色	シルト	炭化物を多量に含む。					
P2	1	10YR3/4 黑褐色	シルト	焼土粒・炭化物跡を微量含む。					
P3	1	10YR2/3 黑褐色	シルト						
P4	1	10YR2/3 黑褐色	シルト						

第 10 図 SI1 穫穴住居跡平面図(2)・断面図

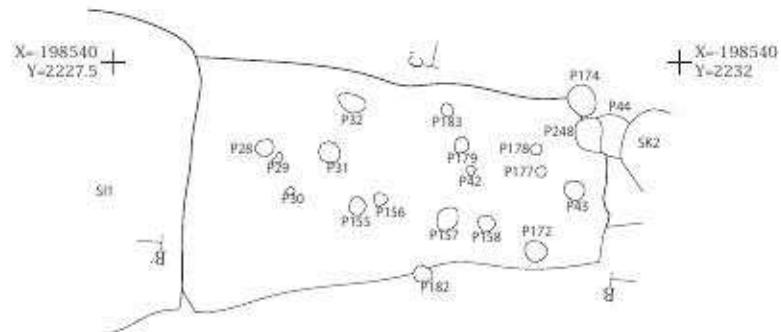
明である

SI3 穫穴住居跡(第 13・14 図) 調査区の中央付近に位置する。SI4、SD6・12 と重複関係にあり、SD6 より古く SI4、SD12 より新しい。削平を受け、残存しているのは掘り方のみである。規模は東西 6.8m、南北 4.7m で、平面形は北東部がやや張り出す隅丸方形である。方位は南辺を基準として N-77°-W である。壁面は西壁・南壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁・北壁はやや外傾して立ち上がる。東壁際中央付近に東西 0.3m、南北 1.5m の段をもつ。底面からの高さは最大 0.1m で、段からの高さは最大 0.05m である。掘り方は 2 層に分層された。1 層は黒褐色シルトを基調とし、焼土粒・XVII 層由来の粒・マンガン粒を含む。2 層は黒褐色粘土質シルトを基調とし、黒褐色シルトブロックを多く含む。掘り方の深さは 0.04 ~ 0.14m で、北壁東側・西壁際が不整形に掘り込まれる。ピットは掘り方上面で 6 基を検出した。柱痕跡は確認されなかった。平面形は円形、楕円形、不整楕円形で、規模は長軸 0.16 ~ 0.39m、短軸 0.14 ~ 0.36m、深さ 0.03 ~ 0.27m である。カマドやその他の施設は検出されなかった。

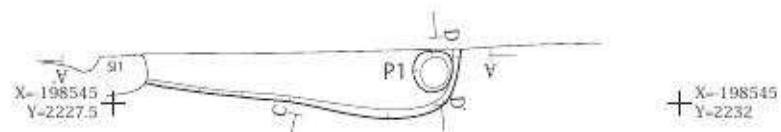
遺物は土師器片、須恵器片、鉱滓が出土しているが、図示できる遺物はない。出土した土師器が細片であり時期を決定できる遺物がないため、詳細な年代は不明である。

SI4 穫穴住居跡(第 15 図) 調査区の中央付近に位置し、XVII 層上面で検出された。SI3、SD12 と重複関係にあり、SI3 より古く、SD12 より新しい。住居中央から北東側は SI3 により削平され L 字状に検出された。検出部分も削平されており、残存していたのは掘り方のみである。規模は東西 5.7m、南北 4.2m で、平面形は隅丸方形と考えられる。方位は南辺を基準として N-80°-W である。掘り方埋土は暗褐色シルトを基調とし焼土粒・マンガン粒を含む。壁面はやや外傾して立ち上がり、底面からの高さは最大 0.1m である。ピットは掘り方上面で 3 基検出した。

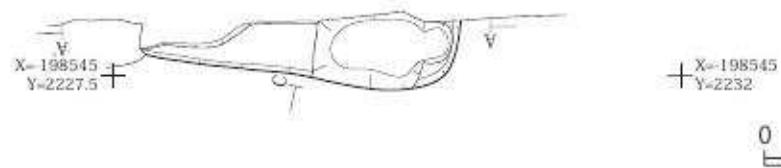
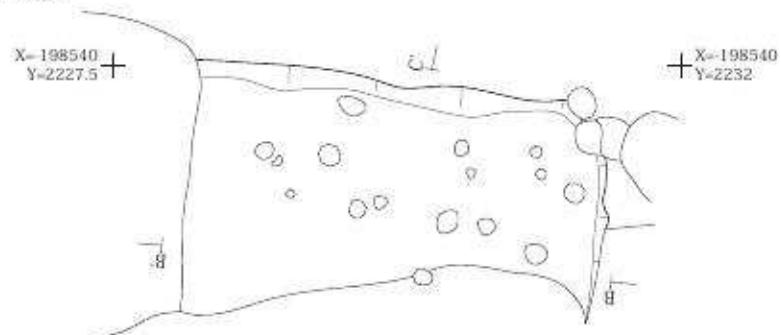
床面



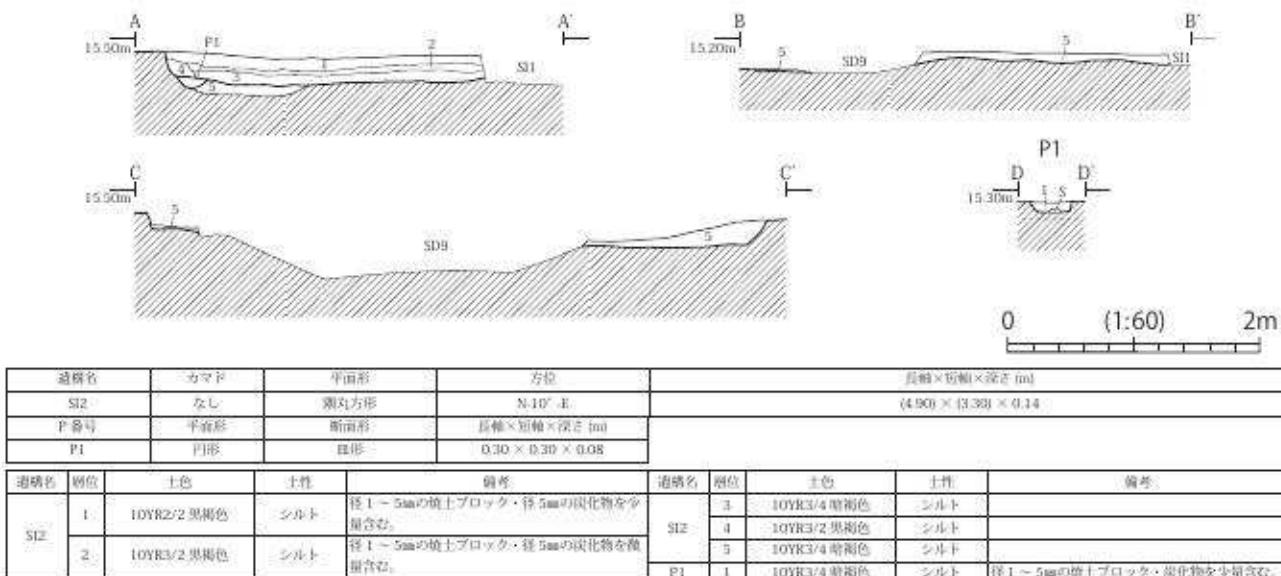
SD9



掘り方



第11図 SI2 竪穴住跡平面図



第12図 SI2 穫穴住居跡断面図

柱痕跡は確認されなかった。平面形は円形、楕円形で、規模は長軸 0.14 ~ 0.2m、短軸 0.14 ~ 0.18m、深さ 0.05 ~ 0.3m である。カマドやその他の施設は検出されなかった。

遺物は掘り方理土から土師器片、鉛滓が出土しているが、図示できる遺物はない。出土した土師器が細片であり時期を決定できる遺物がないため、詳細な年代は不明である。

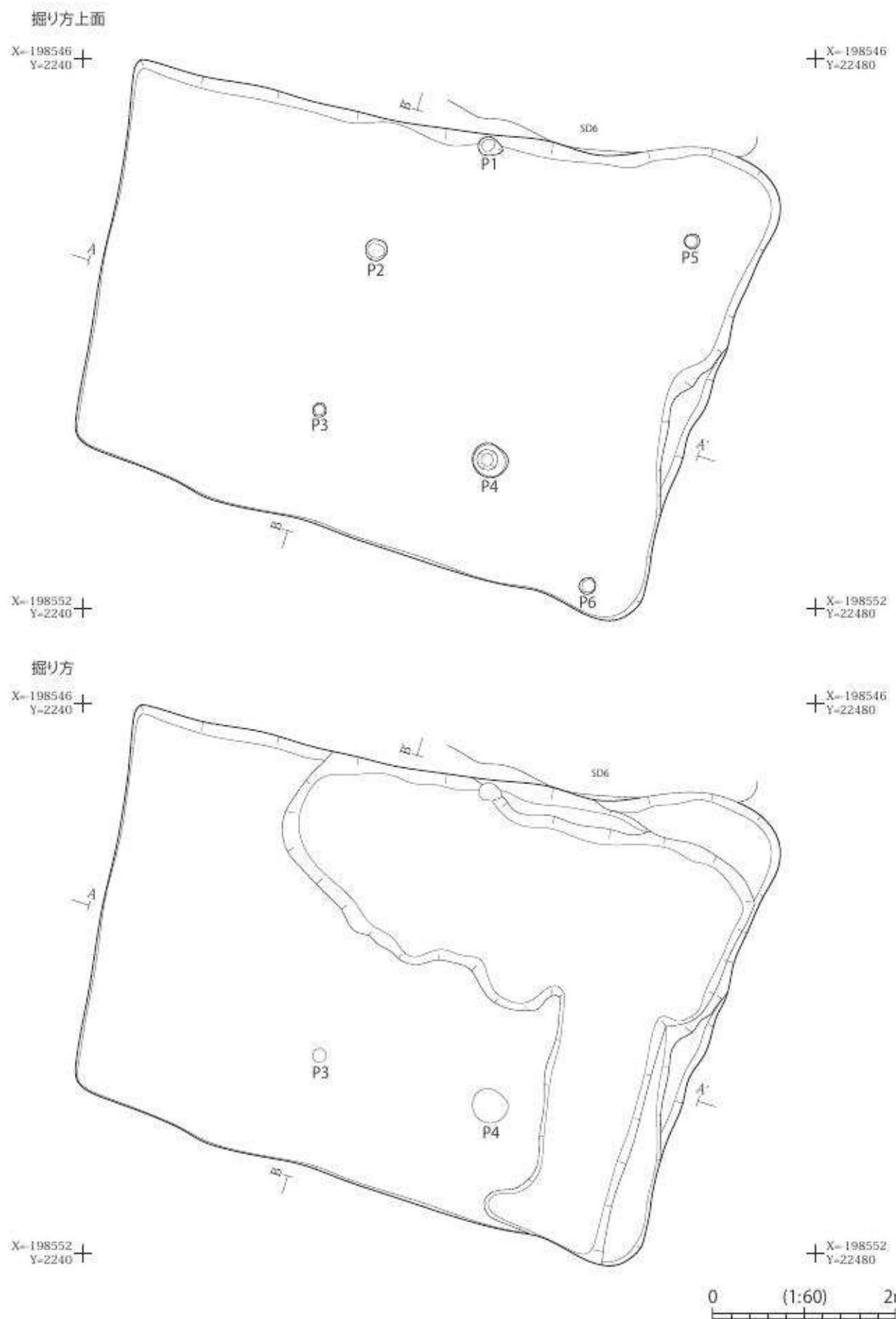
SI5 穫穴住居跡 (第16図) 調査区南側に位置し、XVII層上面で検出した。SK5、SD10・16と重複関係にあり、SK5、SD10より古く、SD16より新しい。削平を受け、残存しているのは掘り方のみである。規模は南北 3.6m、東西 4.0m で、南側は調査区外へと延びる。平面形は隅丸方形と考えられる。方位は西辺を基準として N-4°-E である。堀り方理土は 6 層に分層された。1・2 層は黒褐色シルトを基調とし、炭化物・マンガン粒を含む。3~6 層は暗褐色シルトを基調とし、XVII層由来のブロックを含む。壁面は直線的に外傾して立ち上がる。掘り方の深さは 0.1m で、北西から南東にかけて掘り込まれ、土木具痕が確認された。ピットは掘り方上面で 1 基検出した。柱痕跡は確認されなかった。平面形は楕円形で、断面形は皿形である。規模は長軸 0.3m、短軸 0.2m、深さ 0.06m である。カマドやその他の施設は検出されなかった。

遺物は縄文土器片、土師器片、石器が出土しているが、図示できる遺物はない。出土した土師器が細片であり時期を決定できる遺物がないため、本住居跡の詳細な年代は不明である。

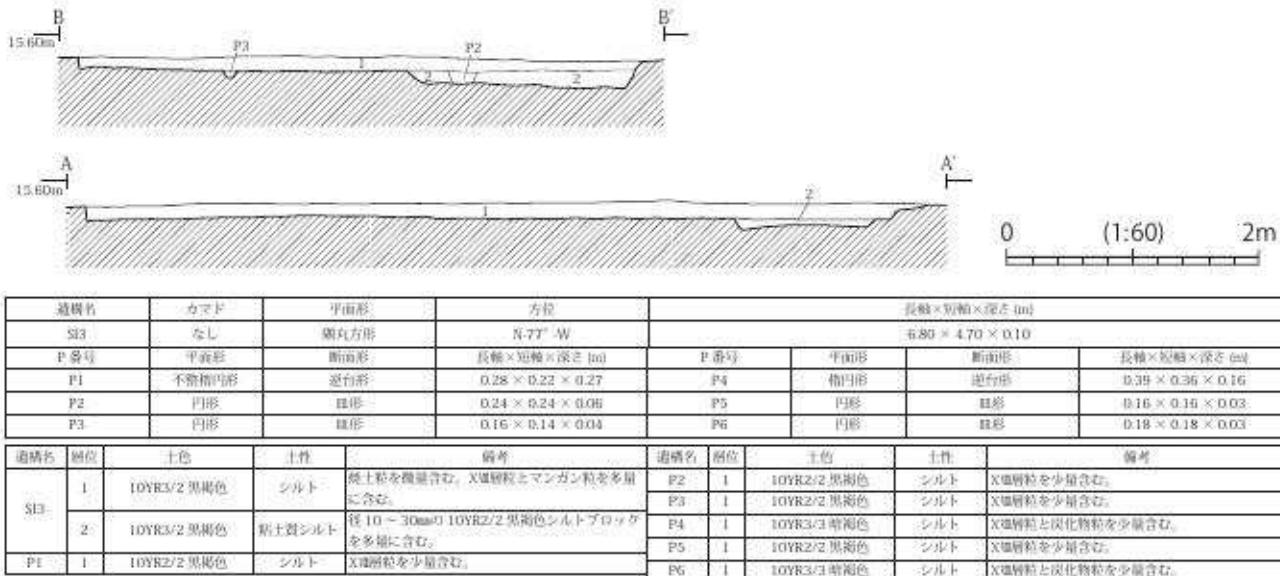
SI6 穫穴住居跡 (第17図) SI 1・2 の南側に位置し、XVIII層上面で検出した。SI1・2、SD12・13 と重複関係にあり、SI1・2 より古く、SD12・13 より新しい。全面削平されており、残存していたのは掘り方のみである。規模は南北 2.56m、東西 4.3m で、平面形は隅丸方形である。方位は南辺を基準として N-2°-E である。堀り方理土は 2 層に分層した。黒褐色シルトを基調とする。壁面は直線的に外傾して立ち上がる。底面からの高さは 0.1m である。ピットは掘り方上面で 2 基検出した。柱痕跡は確認されなかった。平面形は楕円形で、断面形は U 字形と皿形である。規模は長軸 0.2 ~ 0.32m、短軸 0.17 ~ 0.19m、深さ 0.14 ~ 0.2m である。カマドやその他の施設は検出されなかった。

遺物はピット、堀り方理土から土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる遺物はない。出土した土師器が細片であり時期を決定できる遺物がないため、詳細な年代は不明である。

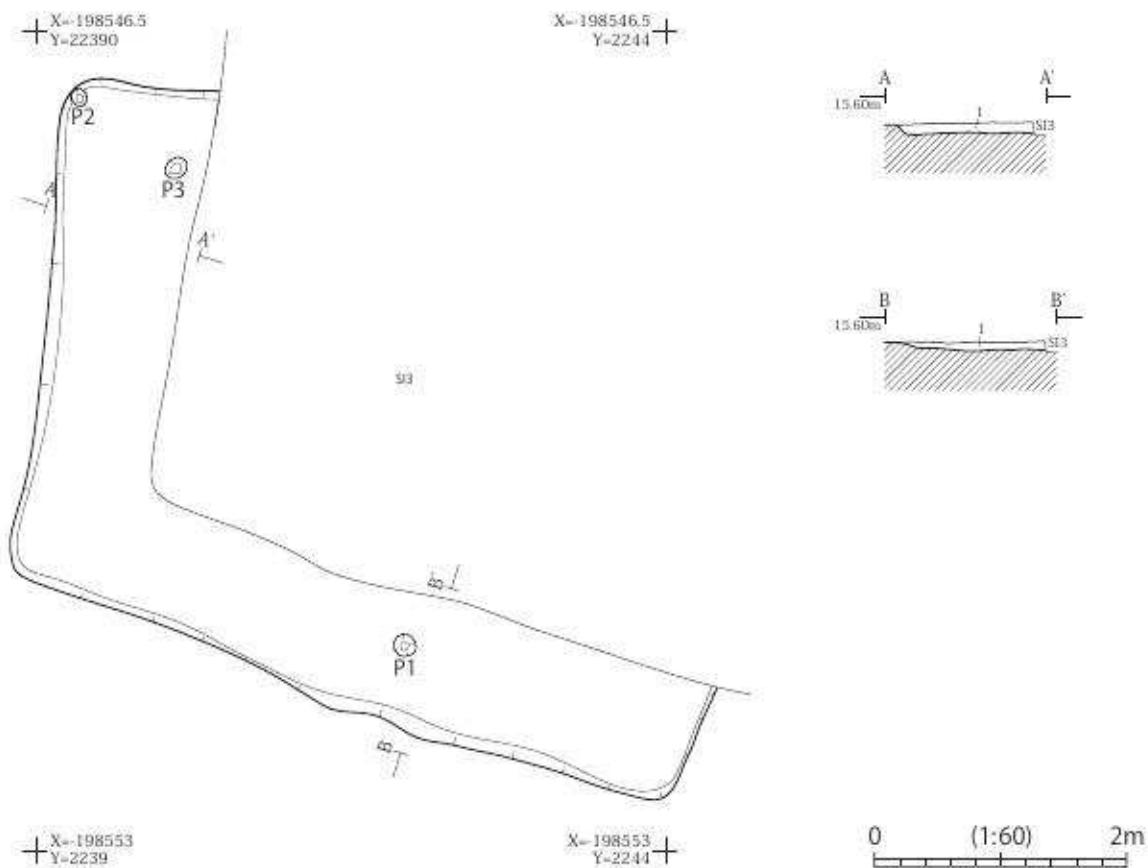
SI7 穫穴遺構 (第18・19図) 調査区中央に位置し、XVIII層上面で検出した。規模は南北 4.54m、東西 5.88m で、平面形は楕円形である。深さは 0.49m である。方位は長軸方向を基準として N-84°-W である。壁面は直線的に外



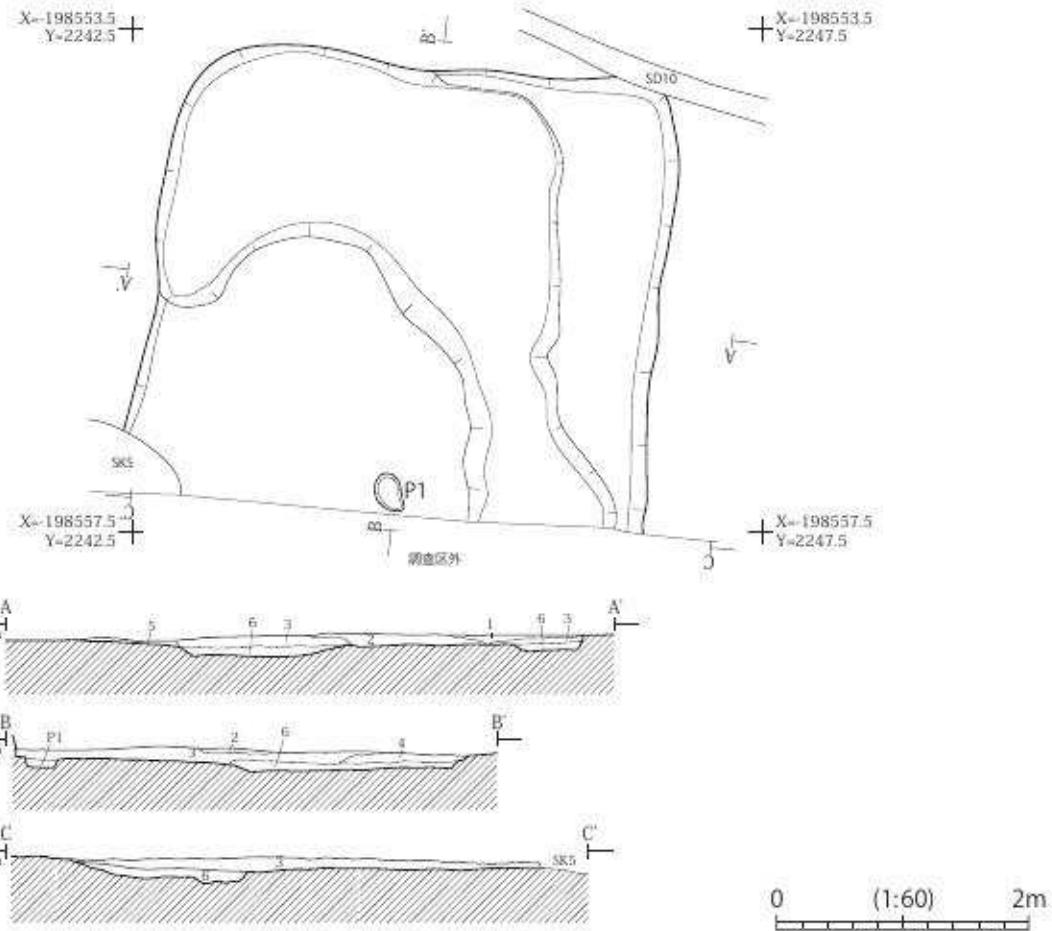
第13図 SI3 竪穴住居跡平面図



第14図 SI3 積穴住居跡断面図



第15図 SI4 積穴住居跡平面図・断面図

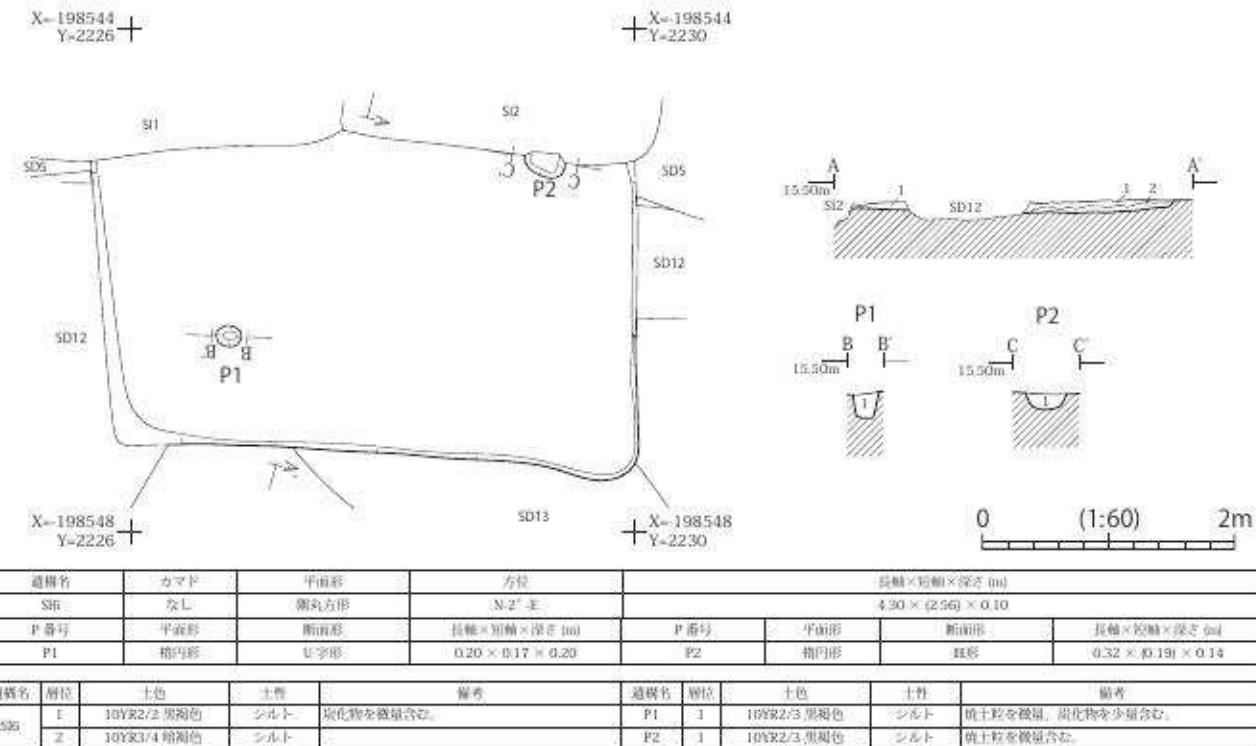


遺構名	カマド	平面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)
S5	なし	圓丸方形	N.4° E.	3.60 × 4.00 × 0.10
P番号	平面終	断面形	長軸×短軸×深さ 1.60	
P1	棺内終	柱形	0.30 × 0.20 × 0.06	
遺構名	層位	土色	土性	備考
S15	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を微量含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を微量含む。マンガン粒を少量含む。
	3	10YR3/3 黒褐色	シルト	マンガン粒を少量含む。
	4	10YR3/4 墓褐色	シルト	
遺構名	層位	土色	土性	備考
S15	5	10YR3/4 墓褐色	シルト	存 5 ~ 10mm の 10YR3/3 墓褐色シルトブロックを少量含む。
	6	10YR3/4 墓褐色	シルト	マンガン粒・存 5mm のX褐色ブロックを含む。
P1	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黒色土が上面に侵入。

第 16 図 S15 整穴住居跡平面図・断面図

傾して立ち上がる。底面は僅かに起伏するが、ほぼ平坦である。堆積土は 20 層に分層された。1 ~ 3 層は黒褐色シルトを基調とし、炭化物・焼土粒を含む。4 ~ 14 層は黒褐色シルトを基調とし、灰層と炭化物層が堆積する。灰層は主に東側に広がりを持ち、炭化物層は東側から中央にかけて堆積する。15 ~ 20 層は暗褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物を微量含む。底面からの高さは 0.49m である。遺物は堆積土及び底面から縄文土器片、土師器、赤焼土器、須恵器片、綠釉陶器片、石器、土製品、粘土塊、楕円形甌・鉱滓がまとまって出土している。この内、土師器壺(第 19 図 1 ~ 3)3 点、赤焼土器(第 19 図 4 ~ 7)4 点、土製品(第 19 図 8)1 点、礫石器(第 19 図 9)1 点を図示し、付着物のある土師器(写真図版 7-8)1 点、綠釉陶器(写真図版 7-9)1 点、楕円形甌などの鉱滓(写真図版 8-12 ~ 14)3 点を写真のみ掲載した。

第 19 図 1 ~ 3 はロクロ調整の土師器の壺と高台付壺である。底部切り離しは回転糸切りで、2 は回転糸切りのうち高台を貼付けている。底部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。4 ~ 7 は赤焼土器の小皿である。全てロクロ調整で、底部切り離しは回転糸切りである。4 は体部が直線的に外傾して立ち上がる。5 は底部から口唇部にかけて内湾気味に外傾する。6 ~ 7 は底部から直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。8 は手づくね土器で、体部から底部が残存する。底部は丸底で内外面の調整はユビナデである。9 は礫石器である。珪化木を石材



第 17 図 SI6 整穴住居跡平面図・断面図

とした磨り石である。中央に使用痕が顕著にみられる。上端部が被熱により黒変している。縁釉陶器は 19 層から出土し、 $5.3 \times 4.7\text{cm}$ の破片である。産地は畿内（京都を除く）である。時期は上記の遺物のうち、底面又は堆積土下層から出土した土師器環（1）、赤焼土器（4～7）の遺物から、年代は 10 世紀前半と考えられる。

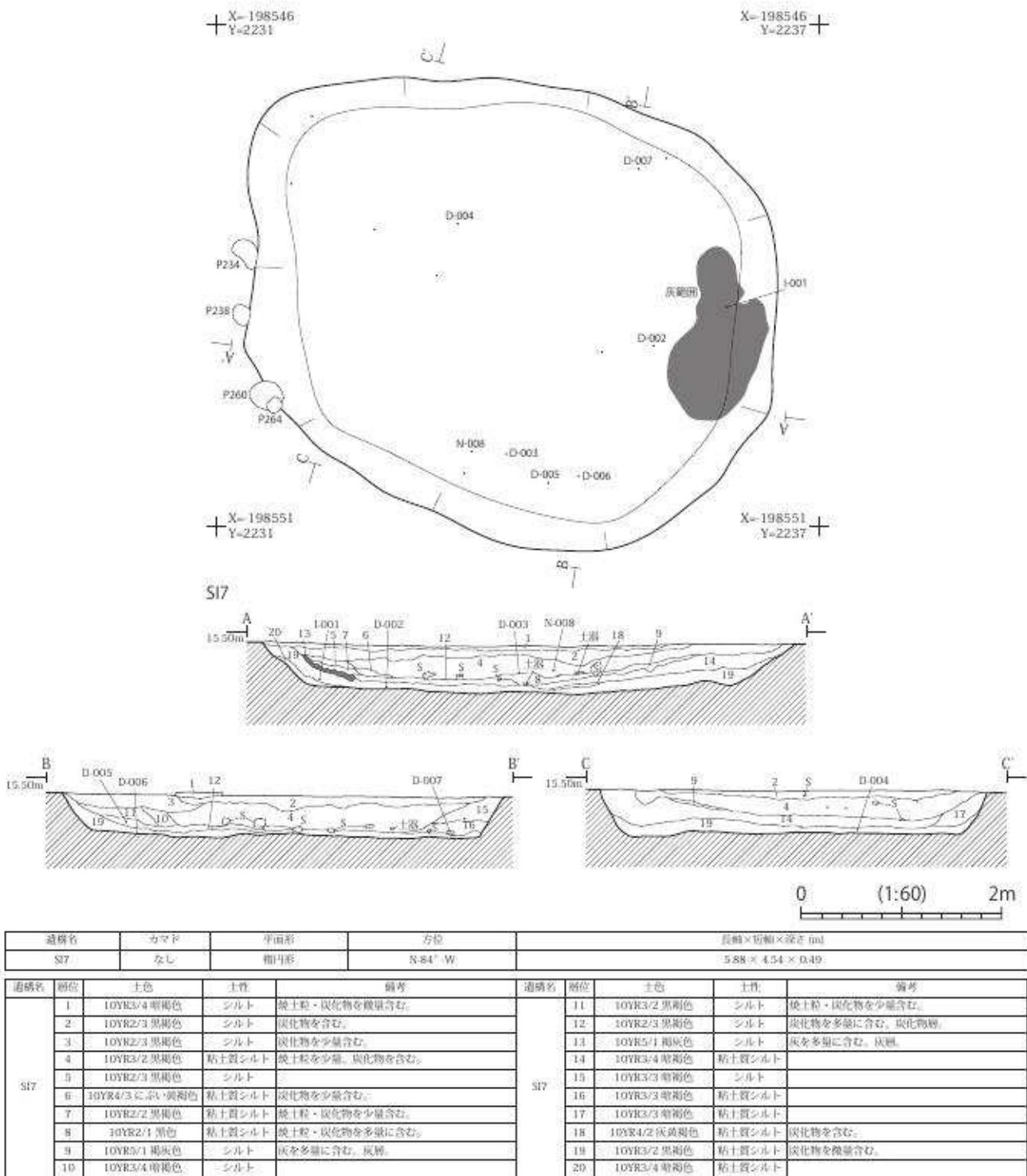
SI8 竪穴遺構（第 20・21 図） 調査区の南側に位置し、XVI 層上面で検出した。SD11・12・15 と重複関係にあり、本遺構が新しい。南側は調査区外へと延びる。規模は東西 4.5m、南北 2.5m 以上で、深さは 0.45m である。平面形は円形と考えられる。壁面は西壁が緩やかに外傾して立ち上がり、北壁・東壁はやや内湾して立ち上がる。堆積土は 4 層に分層した。1～3 層は黒褐色と黒色シルトを基調とし、土器・炭化物を多く含む。4 層は暗褐色シルトを基調とする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は堆積土から縄文土器片、土師器、須恵器片、瓦片、金属製品、椀形津などの鉱滓、粘土塊が出土した。このうち赤焼土器（第 21 図 1～12）12 点を図示し、椀形津などの鉱滓 4 点（写真図版 8-15～18）を写真のみ掲載した。

第 21 図 1・2 は赤焼土器の环である。底部切り離しは回転糸切りで、1・2 ともに底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、口縁部上端がやや外反する。3～12 は赤焼土器の小皿である。全てロクロ調整で、底部切り離しは回転糸切りで、3・4・9 は高台貼付けである。3 は高台貼付けのナデ痕のみである。3・4 は体部が直線的に外傾して立ち上がる。5・6 は底部から口唇部にかけて内湾気味に外傾する。7～9 は底部から直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。10～12 は底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部が外反する。時期は上記の遺物のうち、下層から出土した赤焼土器（1～4・7～9・11）の遺物から、年代は 10 世紀前半と考えられる。

2. 土坑（第 22・23 図）

土坑は 11 基確認された。北西側と南東側にある程度のまとまりを持って分布する。これらのうち 10 基から土師器が出土しており、1 点を図示した。

SK1 土坑（第 22・23 図） 調査区の東側に位置し、XVII 層上面で検出した。東側は調査区外へ延びる。平面形は楕円形と考えられ、長軸方位は N-88°-W である。規模は長軸 0.74m 以上、短軸 0.83m、深さ 0.14m である。断

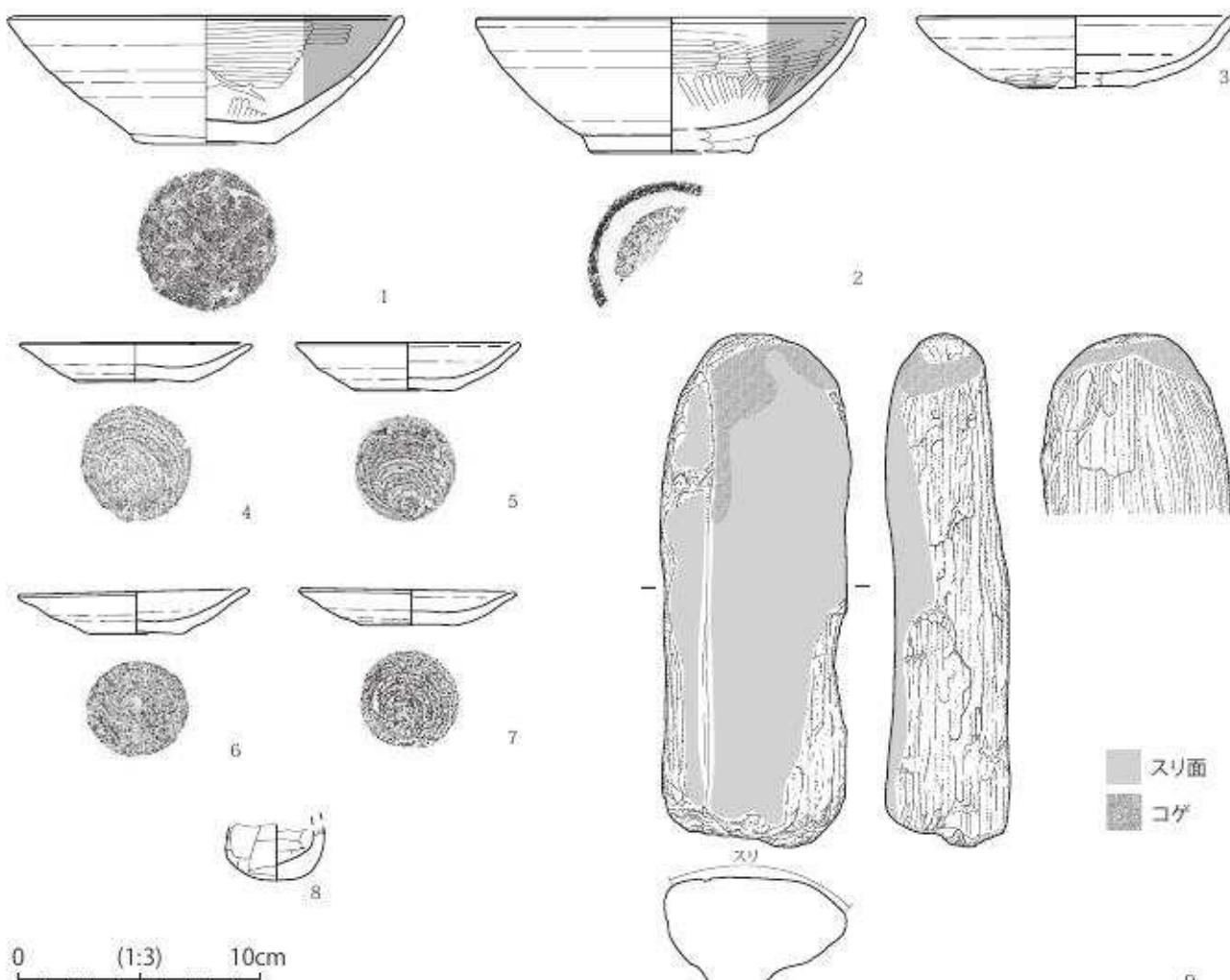


第18図 SI7 竪穴構造平面図・断面図

面形は皿形で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、堆積土は単層で黒色シルトを基調とし、炭化物・焼土ブロックを含む。遺物は土師器がまとまって出土しており、そのうち1点(第23図1)を図示した。

第23図1は齶である。ロクロ使用の球胴の齶で、胴部最大径は中位に持つ。口縁部は外傾し、口縁部上半から口唇部にかけてはやや内溝する。

SK5 土坑(第22図) 調査区の南側に位置し、XVI層上面で検出した。SI5と重複関係にあり、本遺構が新しい。南側は調査区外へ延びる。規模は長軸1.8m以上、短軸0.58m以上、深さ0.07mである。断面形は皿形で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、東側で低くなっている。堆積土は単層で暗褐色シルトを基調と



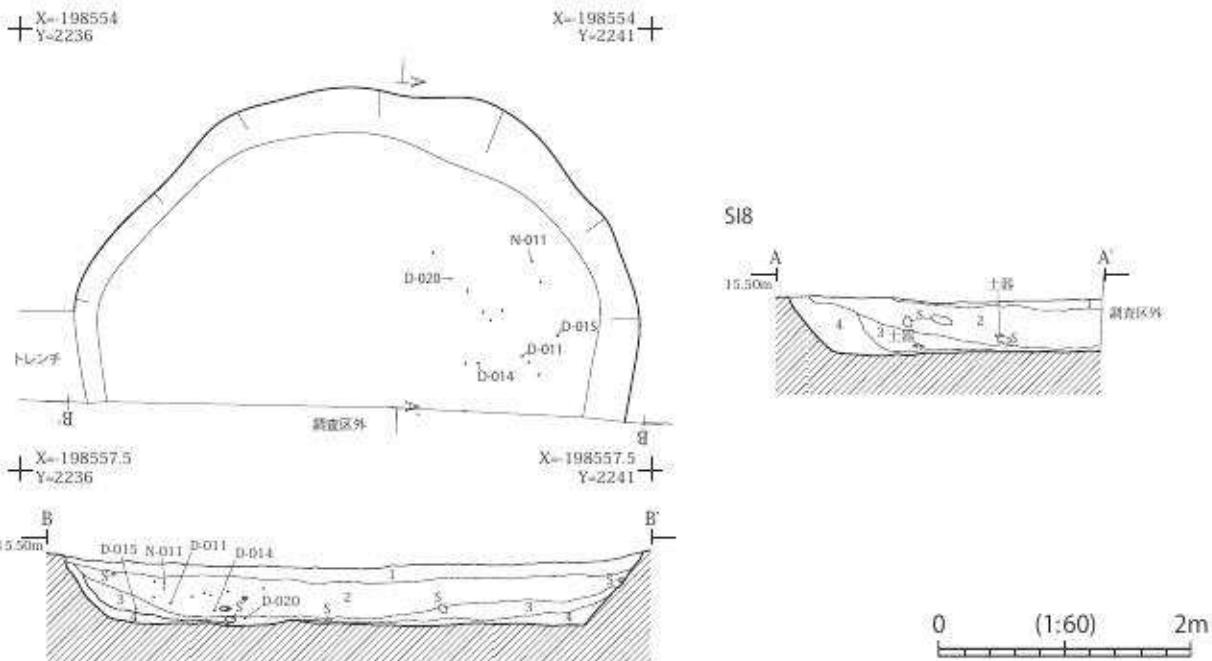
No.	登録番号	遺構名	層位	種別	泥質	口径×底径×厚さ [cm]	断面調整	内部調査	備考	写真図版
1	D-002	SI7	底盤	土師器	灰	16.39 × 5.9 × 5.3	ロクロナデ 細密系切り	ハラミガネ 黒色処理		7-1
2	D-008	SI7	12 層	土師器	灰	16.1 × 6.6 × 5.6	ロクロナデ 細密系切り一高台 貼付け	ハラミガネ 黒色処理		7-2
3	D-006	SI7	下層	土師器	灰	13.2 × 14.6 × 3.0	ロクロナデ ハラケズリ 0mm 密切り	ロクロナデ		7-3
4	D-003	SI7	上層	赤燒土器	小田	9.6 × 4.8 × 1.6	ロクロナデ 細密系切り	ロクロナデ		7-4
5	D-004	SI7	下層	赤燒土器	小田	9.3 × 4.1 × 2.0	ロクロナデ 細密系切り	ロクロナデ		7-5
6	D-005	SI7	下層	赤燒土器	小田	9.5 × 4.0 × 1.9	ロクロナデ 細密系切り	ロクロナデ		7-6
7	D-007	SI7	下層	赤燒土器	小田	8.9 × 4.0 × 1.6	ロクロナデ 細密系切り	ロクロナデ		7-7
No.	登録番号	遺構名	層位	種別	泥質	口径×底径×厚さ [cm]	断面調整	内部調査	備考	写真図版
8	P-004	SI7	一括	土製品	手づくね 土器	—×—×(2.2)	外面: ユビナデ 内面: ユビナデ			7-28
No.	登録番号	遺構名	層位	種別	泥質	石材	長さ×幅×厚さ [cm]	重さ [g]	備考	写真図版
9	Kc-001	SI7	下層	堆石器	礫石	珪化木	21.1 × 7.6 × 5.1	784.22	表面中央に使用痕が確認。 上端部に掛けコゲ範例が見られる。	8-4

第19図 SI7 穴遺構出土遺物

し、黒褐色シルトが混じる。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK6 土坑 (第22図) 調査区の南東側に位置し、XVI層上面で検出した。SK7と重複関係にあり、本遺構が新しい。東側は調査区外へ延びる。平面形は楕円形と考えられ、長軸方位はN-5°-Wである。規模は長軸0.77m以上、短軸0.22m以上、深さ0.17mである。断面形はU字形で、壁面はやや内湾して立ち上がる。底面は平坦で、北側に径0.2~0.3mの礫を検出した。堆積土は単層で黒褐色シルトを基調とし、炭化物を微量含む。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK7 土坑 (第22図) 調査区の南東側に位置し、XVI層上面で検出した。SK6・8、SD10と重複関係にあり、SK6、SD10より古くSK8より新しい。平面形は楕円形で、長軸方位はN-70°-Wである。規模は長軸0.77m、短



遺構名	カマド	平面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)					
SI8	なし	円形	-	(2.50) × 4.50 × 0.45					
遺構名 順位 土色 土性 備考 遺構名 順位 土色 土性 備考									
SI8	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物を微量含む。遺物を多量に含む。	SI8	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	
	2	10YR2/1 黑色	シルト	炭化物を微量含む。遺物を多量に含む。		4	10YR3/4 墓褐色	シルト	

第20図 SI8 穫穴遺構平面図・断面図

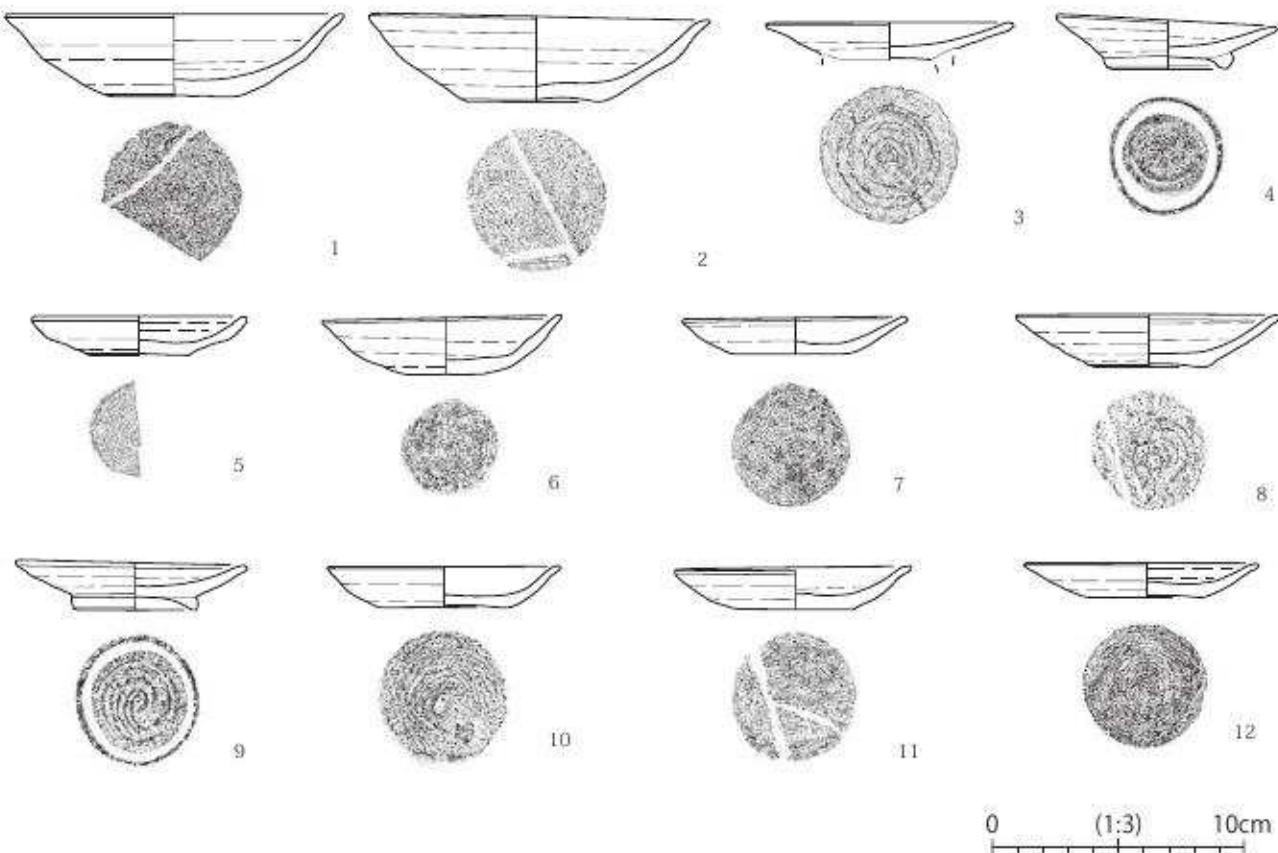
軸 0.73m、深さ 0.22m である。断面形は逆台形で、壁面はやや外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央付近が低くなっている。堆積土は 3 層に分層された。1・2 層は暗褐色シルトを基調とし、炭化物・マンガン粒を含む。3 層は暗褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK8 土坑(第22図) 調査区の南東側に位置し、XVI層上面で検出した。SK7、SD10 と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は梢円形で、長軸方位は N-72°-W である。規模は長軸 0.98m、短軸 0.73m、深さ 0.2m である。断面形は逆台形で、壁面はやや外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は 3 層に分層された。1 層は黒褐色シルトを基調とし、マンガン粒を含み、2 層は暗褐色シルトを基調とし、3 層は暗褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK9 土坑(第22図) 調査区西側に位置し、SD9 の直下で検出した。SI1、SK15、SD5・9、SX1 と重複関係にあり、SI1、SD5・9 より古く、SK15・SX1 より新しい。平面形は方形で、長軸方位は N-7°-E である。規模は長軸 0.78m、短軸 0.76m、深さ 0.23m である。断面形は皿形で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は 3 層に分層され、暗褐色粘土質シルトを主体とし、炭化物を微量含む。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK10 土坑(第22図) 調査区西側に位置し、SD9 の直下で検出した。SK15、SD9 と重複関係にあり、SD9 より古く SK15 より新しい。平面形は不整梢円形で、長軸方位は N-74°-W である。規模は長軸 0.71m、短軸 0.54m、深さ 0.17m である。断面形は逆台形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は僅かに起伏する。堆積土は 2 層に分層され、暗褐色シルトを基調とし、炭化物を微量含む。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK13 土坑(第22図) 調査区の南西側に位置し、XVII層上面で検出した。平面形は不整梢円形で、長軸方位は N-40°-W である。規模は長軸 0.8m、短軸 0.53m、深さ 0.09m である。断面形は逆台形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北西側が低くなっている。堆積土は 4 層に分層された。1 層は褐色シルトを基調とす



No.	試段番号	遺物名	層位	種別	器種	口径×底径×深さ(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	D-012	SI8	下層	赤燒土器	片	13.4×5.0×3.3	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ		7-10
2	D-017	SI8	下層	赤燒土器	片	13.6×5.4×3.4	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ		7-11
3	D-011	SI8	下層	赤燒土器	高台付小皿	9.9×(5.4)×1.5	ロクロナデ 回転糸切り→高台 貼付け→剥落 高台付小皿の ナメ痕あり	ロクロナデ		7-12
4	D-020	SI8	下層	赤燒土器	高台付小皿	8.8×4.6×2.2	ロクロナデ 回転糸切り→高台 貼付け→ヘラナデ	ロクロナデ		7-13
5	D-009	SI8	黒色土層	赤燒土器	小皿	8.6×4.0×1.6	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ	肉眼レンズ	7-14
6	D-019	SI8	一括	赤燒土器	小皿	9.6×3.3×2.4	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ		7-15
7	D-014	SI8	下層	赤燒土器	小皿	8.9×4.6×1.0	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ		7-16
8	D-016	SI8	下層	赤燒土器	小皿	10.4×4.5×2.1	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ		7-17
9	D-015	SI8	下層	赤燒土器	高台付小皿	9.3×4.9×2.5	ロクロナデ 回転糸切り→高台 貼付け	ロクロナデ	目視窓外部に付着物あ り	7-18
10	D-010	SI8	上層	赤燒土器	小皿	9.3×5.2×1.7	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ		7-19
11	D-013	SI8	下層	赤燒土器	小皿	9.3×4.7×1.7	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ		7-20
12	D-018	SI8	中層	赤燒土器	小皿	9.4×4.8×1.4	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ		7-21

第21図 SI8 穴式遺構出土遺物

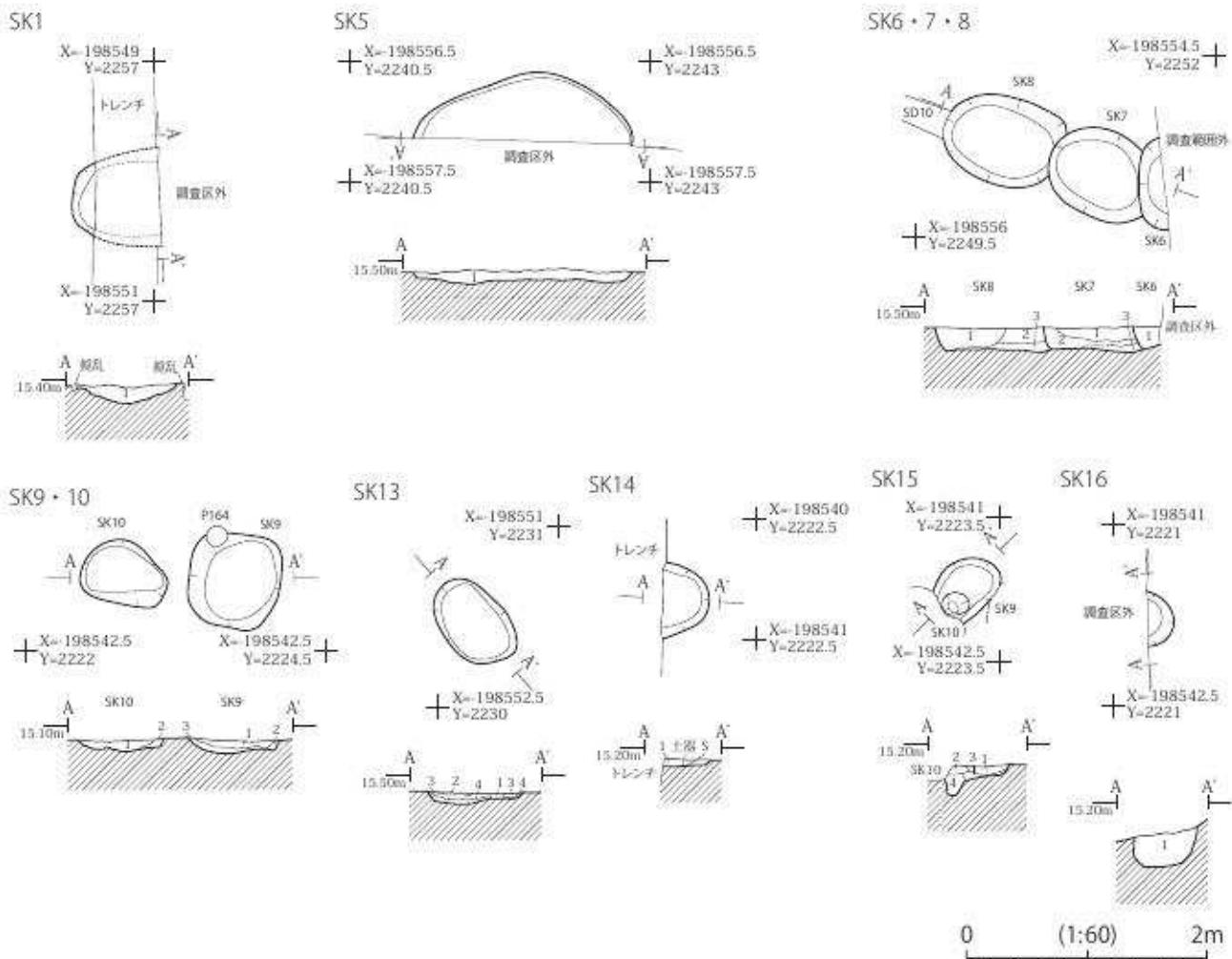
る。2層は暗褐色シルトを基調とし、焼土粒・炭化物を少量含む。3層は黒褐色シルトを基調とし、焼土粒・炭化物を多量に含む。4層は暗褐色シルトを基調とし、焼土粒を微量含む。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK14 土坑(第22図) 調査区西壁でSD9の直下で検出され、西側は調査区外へ延びる。SD9、SX1と重複関係にあり、SD9より古く、SX1より新しい。平面形は楕円形と考えられ、長軸方位はN-88°-Eである。規模は長軸0.64m以上、短軸0.4m以上、深さ0.08mである。断面形は皿形で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は単層で暗褐色シルトを基調とし、焼土粒・炭化物を微量含む。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SK15 土坑(第22図) 調査区西側でSD9の直下で検出された。SK9・10、SD9、SX1と重複関係にあり、SK9・10、SD9より古く SX1より新しい。平面形は楕円形で、長軸方位はN-44°-Eである。規模は長軸0.55m以上、短軸0.45m、深さ0.3mである。断面形は皿形で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。底面は長軸0.22m、

短軸 0.18m、深さ 0.18m のピット状に掘り込まれており、本遺構は柱穴の可能性もある。堆積土は 4 層に分層された。暗褐色シルトを基調とし、炭化物を微量含む。遺物は土器器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

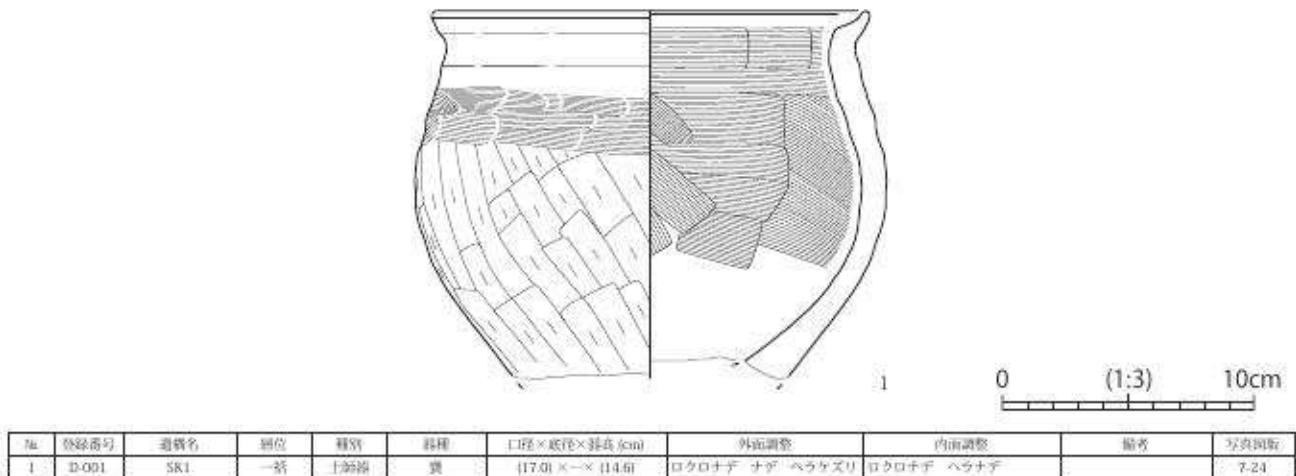
SK16 土坑 (第 22 図) 調査区西壁で SD9 の直下で検出され、西側の調査区外へ延びる。SD9 と重複関係にあり、SD9 より古い。平面形は円形と考えられ、規模は南北 0.46m、東西 0.22m、深さ 0.28m である。断面形は U 字形で、



遺構名	平面形	断面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)	遺構名	平面形	断面形	方位	長軸×短軸×深さ (m)
SK1	橢円形	皿形	N.88°W	0.74 × 0.83 × 0.14	SK10	不整椭円形	逆台形	N.74°W	0.71 × 0.54 × 0.17
SK5	円形	皿形		1.80 × 0.58 × 0.07	SK13	不整椭円形	逆台形	N.40°W	0.80 × 0.53 × 0.09
SK6	橢円形	U字形	N.5°W	0.77 × 0.22 × 0.17	SK14	椭円形	皿形	N.48°E	0.64 × 0.40 × 0.08
SK7	橢円形	逆台形	N.70°W	0.77 × 0.73 × 0.22	SK15	椭円形	皿形	N.44°E	0.55 × 0.45 × 0.30
SK8	橢円形	逆台形	N.72°W	0.98 × 0.73 × 0.20	SK16	円形	U字形		0.46 × 0.22 × 0.28
SK9	方形	皿形	N.7°E	0.78 × 0.76 × 0.23					

遺構名	層位	土色	土性	備考	遺構名	層位	土色	土性	備考
SK1	1	10YR2/1 黒褐色	シルト	径 5mm の塊状ブロックを少額。炭化物を微量含む。	SK10	1	10YR3/3 塔褐色	シルト	炭化物を微量含む。
SK5	1	10YR2/3 塔褐色	シルト	10YR2/3 塔褐色シルトの表層土。		2	10YR3/4 塔褐色	シルト	
SK6	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を微量含む。		1	10YR4/4 塔褐色	シルト	
SK7	1	10YR2/3 塔褐色	シルト	炭化物・マンガン鉱を微量含む。		2	10YR3/4 塔褐色	シルト	炭土質・炭化物を少量含む。径 2 ~ 5mm のX薄層ブロックを多量に含む。
	2	10YR3/4 塔褐色	シルト			3	10YR2/2 黑褐色	シルト	炭土質・炭化物を多量に含む。径 1 ~ 2mm のX薄層ブロックを多量に含む。
	3	10YR3/4 塔褐色	粘土質シルト			4	10YR3/4 塔褐色	シルト	砂土質を微量含む。径 1 ~ 5mm の 10YR2/2 黒褐色シルトブロックを微量含む。
SK8	1	10YR2/3 黑褐色	シルト	マンガン鉱を微量含む。	SK14	1	10YR3/4 塔褐色	シルト	砂土質・炭化物を微量含む。
	2	10YR3/4 塔褐色	シルト			1	10YR3/3 塔褐色	シルト	
	3	10YR3/3 塔褐色	粘土質シルト			2	10YR3/4 塔褐色	シルト	炭化物を微量含む。
SK9	1	10YR3/4 塔褐色	シルト	炭化物を微量含む。		3	10YR4/6 塔褐色	シルト	
	2	10YR3/3 塔褐色	シルト			4	10YR3/4 塔褐色	シルト	
	3	10YR3/4 塔褐色	粘土質シルト		SK15	1	10YR4/2 黄褐色	粘土質シルト	

第 22 図 SK1・5~10・13~16 土坑平面図・断面図



第23図 SK1 土坑出土遺物

壁面は底面から急角度で立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は単層で灰黄褐色シルトを基調とする。遺物は出土していない。

3. 溝跡(第8・24・25図)

調査区南側を中心に7条検出された。東西に走る一群とやや北を向く溝、「コ」の字状に屈曲する溝とに分けられる。SD7は基本層XV層から、SD11・15は基本層XVII層から掘り込まれていることを調査区壁面の観察で確認した。東西方向に走る溝跡SD7・11・13・15は上面で検出されたSD1～4と同じ方向で、繰り返し溝が掘り込まれている。出土遺物が乏しく時期は不明だが、検出層位から古代の溝として考えられる。出土遺物は縄文土器、土師器、須恵器、瓦、手づくね土器が出土しているが、いずれも小片である。SD12・13から出土し、遺構間接合した手づくね土器1点と、SD12・16から出土した土師器2点を図示した。

SD7溝跡(第8・24図) 調査区南西側で西から南東にかけて検出した。SD1～3・11・12と重複関係にあり、SD1～3より古く、SD11・12より新しい。両端は調査区外へと延びる。溝方向はN-63°-Wで、規模は長さ15m、上幅1.5m、下幅0.35m、深さ0.54mである。断面形は逆台形で、堆積土は5層に分層された。1層は褐灰色粘土質シルトを基調としマンガン粒を微量含む。2・3層は黒褐色粘土質シルトを基調とし酸化鉄の沈着があり、0.1～0.4m前後の自然礫が底面で検出された。4・5層は黄褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は堆積土から土師器片と須恵器片、瓦片、粘土塊が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD10溝跡(第8・24図) 調査区の南東側に位置し、XVI層上面で検出した。SI5、SK7・8と重複関係にあり、本遺構が新しい。東西端は調査区内で収束する。溝方向はN-69°-Wで、規模は長さ8.1m、上幅0.23m、下幅0.15m、深さ0.06mである。断面形はU字形で、堆積土は単層で黒褐色シルトを基調とする。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD11溝跡(第8・24図) 調査区南西側で北西から南東にかけてXVII層上面で検出した。SI8、SD7・12・15と重複関係にありSI8、SD7より古く、SD12・15より新しい。北西端は調査区内で収束し、南東端は調査区外へ延びる。溝方向はN-67°-Wで、規模は長さ15.6m、上幅1m、下幅0.7m、深さ0.18mである。断面形は逆台形で、堆積土は2層に分層された。1層は黒褐色シルトを基調とし、炭化物・径20～30mmの黒褐色シルトブロックを含む。2層は黒褐色シルトを基調とし、径10～50mmのぶい黄褐色シルトブロックを含む。遺物は土師器片、鉢滓が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD12溝跡(第8・24・25図) 調査区中央から西側においてXVII層上面で「コ」の字状に検出した。SI3・4・6・

8、SD7・11・13・15と重複関係にあり、SI3・4・6・8、SD7・11より古く、SD13・15より新しい。規模は総延長34m、上幅2.25m、下幅1.7m、深さ0.2mである。溝の方向は北辺がN-85°-W、西辺がN-17°-E、南辺がN-63°-Wである。断面形は逆台形で、堆積土は2層に分層された。黒褐色シルトに黄褐色シルトが混入した土を基調とする。北辺の東側はSI3・4に削平され不明である。南辺は、SI8によって削平されるが調査区外へ延びると考えられる。遺物は土師器片と手づくね土器が出土しており、土師器(第25図1)1点、SD13から出土し接合した手づくね土器(第25図3)1点を図示した。

第25図2は壺の把手で、棒状でユビオサエとユビナデで調整を行っている。第25図3は手づくね土器である。底部から湾曲しながら立ち上がり、口唇部が僅かに外反する。内外面ともユビナデによる調整がなされている。

SD13溝跡(第8・24・25図) SD12の北辺と南辺の間を南北方向にXVII層上面で検出した。SI6、SD12と重複関係にあり、本遺構が古い。溝方向はN-34°-Wで、規模は長さ8.5m、幅1.2~2.2m、深さ0.13mである。断面形はU字形で、2層に分層された。1層は黒褐色シルトを基調とし、上面に多量の焼土粒と炭化物を少量含む。2層は暗褐色シルトを基調とする。両端はSD12によって削平を受ける。遺物は土師器片、須恵器片、瓦片、手づくね土器、粘土塊がそれぞれ出土し、SD12から出土し接合した手づくね土器(第25図2)1点を図示した。

SD15溝跡(第8・24図) 調査区南西側で平行するSD7の北側で、XVII層上面で検出した。SI8、SD7・11・12・13と重複関係にあり、本遺構が古い。両端は調査区外へと延びる。溝方向はN-64°-Wで、規模は長さ16.4m、上幅2.2m、下幅1.8m、深さ0.21mである。断面形は逆台形で、堆積土は2層に分層された。1層は暗褐色粘土質シルトを基調とする。2層は灰黄褐色粘土質シルトを基調とし、酸化鉄を多量に含む。遺物は縄文土器片、土師器片、金属製品が出土しているが、図示できる遺物はない。

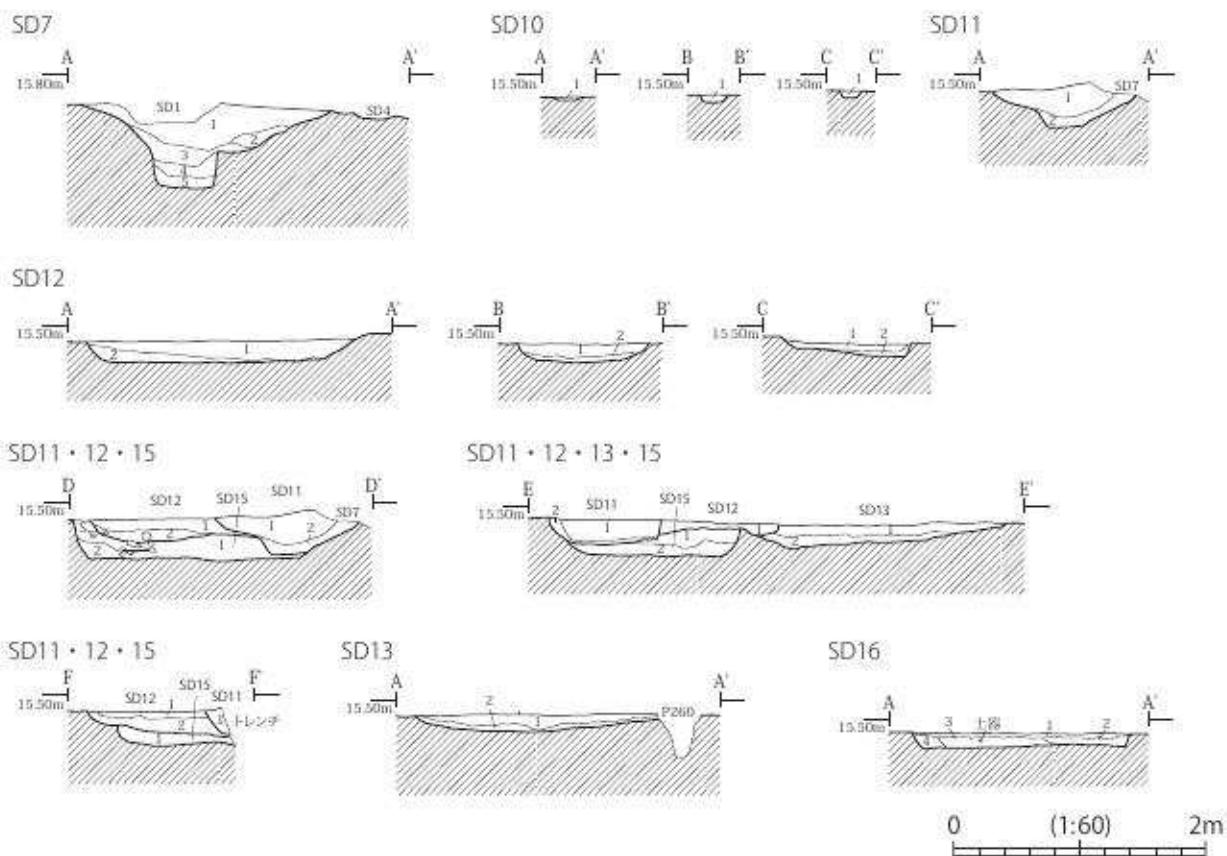
SD16溝跡(第8・24・25図) 調査区の南側に位置し、XVII層上面で検出した。SI5と重複関係にあり、本遺構が古い。西端は調査区内で収束し、東端はSI5により削平されるが、SI5以東に溝跡が確認されないため住居跡内で収束すると考えられる。溝方向はN-73°-Wで、規模は長さ8.5m、上幅1.8m、下幅1.6m、深さ0.11mである。断面形はU字形で、堆積土は4層に分層した。1層は暗褐色シルトを基調とする。2~4層は黒褐色シルトとにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は土師器片、赤焼土器、須恵器片が出土しており、そのうち1点(第25図3)を図示した。

第25図3は赤焼土器の小皿である。ロクロ調整で、底部切り離しは回転糸切りである。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁部上端がやや外反する。

4. 性格不明遺構(第26図)

調査区西端で1基検出した。豊穴住居跡の可能性も考えられるが、遺構の切り合いが多く残存状況は良くないことから性格不明遺構とした。遺物は土師器が出土している。

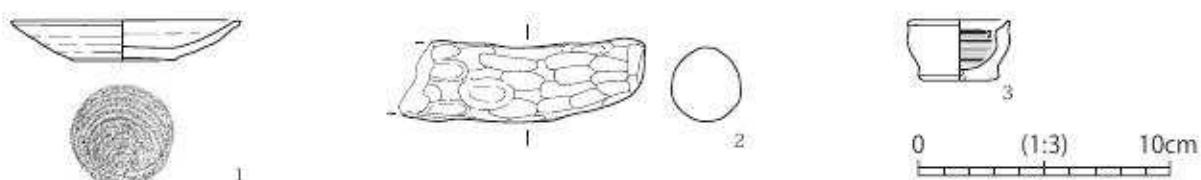
SX1性格不明遺構(第26図) 調査区西端に位置し、SD9の直下で検出した。SI1、SK9・10・14・15、SD9と重複関係にあり、本遺構が古い。東側はSI1に、南側はSK9・15、SD9によって削平され、西側は調査区外へ延びる。平面形は不整形である。規模は東西2.25m、南北2m、深さは0.09mである。断面形は皿形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は僅かに起伏する。堆積土は単層で褐色シルトを基調とし、焼土粒・炭化物が堆積する。遺物は土師器片が出土しているが、図示できる遺物はない。



断面名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ [m]	断面名	平面形	断面形	方位	長さ×幅×深さ [m]
SD7	直線	連合形	N-63°W	15.00 × 1.50 × 0.54	SD12	直線	連合形	N-17°E	15.25 × 0.17
SD10	直線	U字形	N-69°W	8.10 × 0.23 × 0.06	SD12	直線	連合形	N-63°W	15.00 × 1.32 × 0.20
SD11	直線	連合形	N-67°W	15.60 × 1.00 × 0.18	SD13	直線	U字形	N-34°W	8.50 × 1.20 × 0.13
SD12	U字	連合形	N-73°W	14.00 × 2.25 × 0.20	SD15	直線	連合形	N-64°W	16.40 × 2.20 × 0.21
SD12 北溝	直線	連合形	N-89°W	— × 1.02 × 0.20	SD16	直線	U字形	N-73°W	8.50 × 1.80 × 0.11

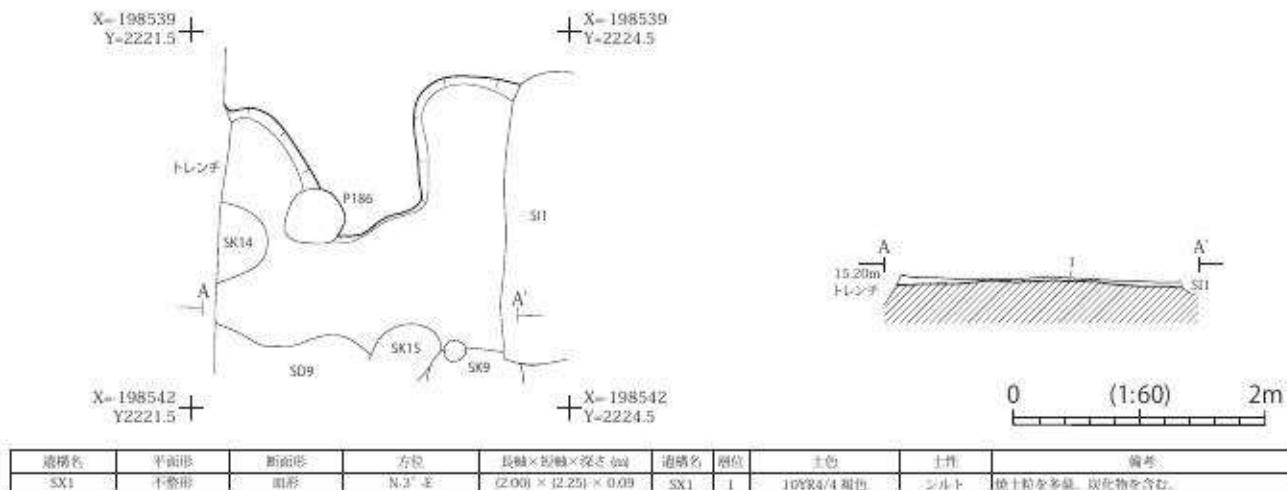
断面名	層位	土色	土性	備考	断面名	層位	土色	土性	備考
SD7	1	10YR4/1 深灰色	粘土質シルト	マンガン粉を微量含む。鐵分の沈着あり。	SD12	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR4/2 深黃褐色シルトの粘合土。
	2	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	鉄5~20mmのX型團塊ブロックを少量含む。		2	10YR4/3 ぶい黄褐色	粘土質シルト	X團塊との混合土。
	3	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	炭化物を微量含む。鉄分の沈着あり。	SD13	1	10YR2/2 黑褐色	シルト	燒土粒を多量。炭化物を少量含む。
	4	10YR4/2 深黃褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。		2	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	5	10YR4/3 ぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を微量含む。	SD15	1	10YR3/4 墓褐色	粘土質シルト	炭化鉄を少許含む。
SD10	1	10YR3/2 黑褐色	シルト			2	10YR4/2 深黃褐色	粘土質シルト	炭化鉄を多量に含む。
	2	10YR2/2 黑褐色	シルト	炭化物を微量含む。鉄20~30mmの10YR3/2 黑褐色シルトブロックを含む。	SD16	1	10YR3/4 墓褐色	シルト	炭化物を微量含む。
SD11	1	10YR3/2 黑褐色	シルト	鉄10~50mmの10YR4/3 ぶい黄褐色シルトブロックを含む。		2	10YR3/2 黑褐色	シルト	
	2	10YR3/2 黑褐色	シルト	鉄5~10mmの3層ブロックを含む。		3	10YR4/3 ぶい黄褐色	シルト	
	3	10YR3/2 黑褐色	シルト			4	10YR3/3 黑褐色	シルト	鉄5~10mmの3層ブロックを含む。

第24図 SD7・10~13・15・16溝跡断面図



No.	登録番号	断面名	層位	種別	器種	口径×底径×高さ [cm]	断面調整	内面調整	備考	写真図版
1	D-021	SD16	埴輪上	埴輪上部	小皿	9.2 × 4.1 × 1.6	クロナゲ、回転系切り	ロクロナゲ	7-22	
2	D-022	SD12	埴輪	埴輪	盤	長さ9.8 幅2.9	コビオサエ、ユビナゲ	—	用手	7-23
3	P-003	SD12・SD13	埴輪上	土製品	手くね土器	口径×底径×高さ [cm]		整形・調整・備考		写真図版
						4.0 × 2.8 × 2.4		外面:ユビナゲ 内面:コビオサエ		7-27

第25図 SD12・13・16溝跡出土遺物



第 26 図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

第 6 章 まとめ

- 鍛冶屋敷前遺跡は、名取川と笊川によって形成された自然堤防上に立地する。現況の標高は 16.1 ~ 16.8m である。今回の調査区は、平成 26 年度に発掘調査を行った鍛冶屋敷前遺跡第 2 次調査 I 区と II 区のほぼ中間に位置する。
- 今回の調査では、基本層序が I 層 ~ XVII 層に細分されたため、古代の遺構確認面を III 層とした 2 次調査との整合性はとっていない。遺構検出面も細分されたことから、上層検出遺構と下層検出遺構として報告した。
- 遺構について
 - 上層検出遺構 基本層 VI ~ XV 層の間で、土坑 2 基、溝跡 9 条、ピット 279 基を検出した。溝跡の方向は、ほぼ直線方向に延びる 8 条のうち、東西方向が 4 条、北西から南東方向が 4 条と分けられた。ほかに東西方向に蛇行しながら延びる溝跡 1 条がある。検出されたピットは、いずれも小規模で柱痕跡を持たないものが多く、建物跡になるような配置は確認できなかった。これらの遺構の時期については、時期決定できる遺物はないが、周辺の調査状況から古代から中近世のものと考えられる。
 - 下層検出遺構 基本層 XVI ~ XVII 層の間で、竪穴住居跡 6 軒、竪穴遺構 2 基、土坑 11 基、溝跡 7 条、性格不明遺構 1 基を検出した。
 - 竪穴住居跡 一部の住居跡の壁際にわずかに床面が残存しているだけで、ほとんどは床面まで削平を受けしており、床面施設やカマドは検出されず掘り方だけが残存している。出土遺物は、土師器、須恵器、鉢等がある。
 - 竪穴遺構 大型で円形を基調としており、竪穴住居跡に比べて深く掘り下げられている。底面は平坦で床面施設は検出されていない。出土遺物としては、土師器、赤焼土器、緑釉陶器、金属製品、鉢等がある。
 - 溝跡 溝跡の方向は、直線方向に延びる 6 条のうち、北西から南東方向のものが 5 条、北北西から南南東方向のものが 1 条ある。ほかに調査区西半部で、「コ」の字状に延びる溝跡 1 条を検出した。
- 遺物について 土師器、赤焼土器、須恵器、緑釉陶器、石器、土製品、金属製品、鉢等が出土しているが、多くが土師器の細片である。縄文時代の土器、石器、磨製石斧、石製品も出土している。

①赤焼土器 総計 17 点のうち 16 点が 2 基の竪穴遺構から集中出土しており、壺・小皿・高台付小皿がある。底部の切り離しは全て回転糸切り無調整で、高台貼付けのものがある。赤焼土器壺の口径 13.4 ~ 13.6cm、器高 3.3 ~ 3.4cm に対して、小皿の口径は 8.6 ~ 10.4cm、器高は 1.4 ~ 2.4cm である。共伴する遺物には、土師器壺があるが須恵器は出土していない。このうち小皿・高台付小皿について、体部及び口縁部の形態から分類した(第 27 図)。

I 類：底部から体部が直線的に外傾し口縁部に到る。 D-003、011、020

II 類：底部から体部が内湾気味に外傾し口縁部に到る。 D-004、009、019

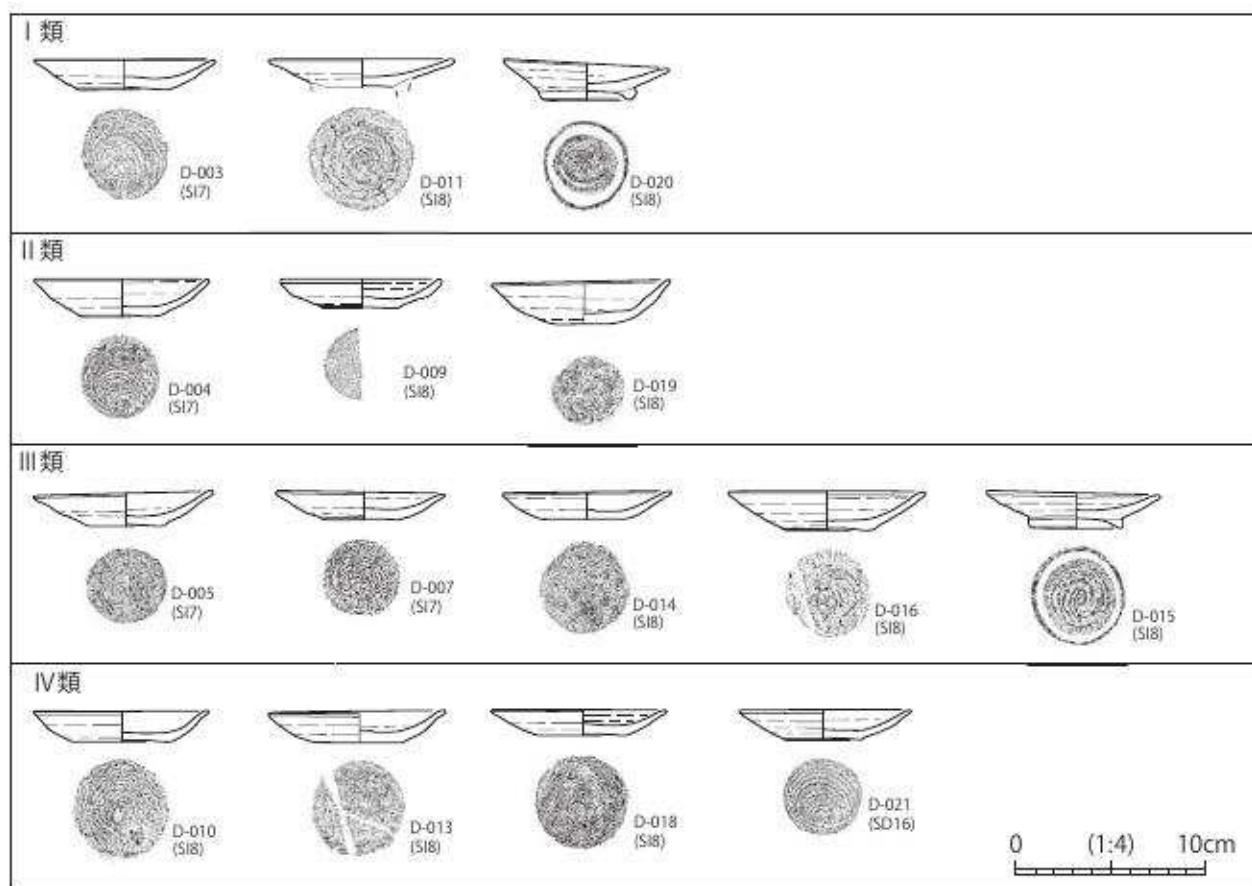
III 類：底部から体部が直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。 D-005、007、014、015、016

IV 類：底部から体部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する。 D-010、013、018、021

小皿・高台付小皿の大きさや形態に差は無いことから、2 基の竪穴遺構は同時期のものと考えられる。時期については、SI7 竪穴遺構で共伴している土師器壺から、10 世紀前半と考えられる。

②金属製品・鉱滓 金属製品は溝跡を中心に刀子の茎・釘 7 点が出土したが、いずれも堆積土からの出土である。鉱滓は鍛冶滓と椀形滓に分類され、鍛冶滓は 1165.12g、椀形滓 10 点 1424.75g が竪穴住居跡、土坑、溝跡を中心に出土している。

5. 今回の調査では、竪穴住居跡と竪穴遺構があるが、2 次調査で確認されていた鍛冶関連遺構は確認されなかつた。2 次調査で確認された竪穴住居跡の時期も、9 世紀前半から 10 世紀前半であることから、この周辺にこの時期の集落が広がっているものと考えられる。鍛冶関連遺構や鍛冶滓と椀形滓があることから、集落内で鍛冶生産が行われていたことが考えられる。



第 27 図 鍛冶屋敷前遺跡第 3 次調査出土赤焼土器集成図

参考文献

- 宮城県教育委員会 1984 「鹿島遺跡 竹之内遺跡」 宮城県文化財調査報告書第 101 集
- 仙台市教育委員会 2000 「銀治屋敷 A 遺跡・銀治屋敷前遺跡」 仙台市文化財調査報告書第 245 集
- 仙台市教育委員会 2016 「西台畠遺跡第 9 次調査」 仙台市文化財調査報告書第 441 集
- 仙台市教育委員会 2018 「銀治屋敷 A 遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか—仙台市富沢駅西土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書一」
仙台市文化財調査報告書第 466 集



調査区全景(南側上空から)



調査区完掘全景(西から)

写真図版1 調査区全景



東壁土層断面 A-A'(北西から)



東壁土層断面 B-B'(西から)



南壁土層断面 C-C'(北から)



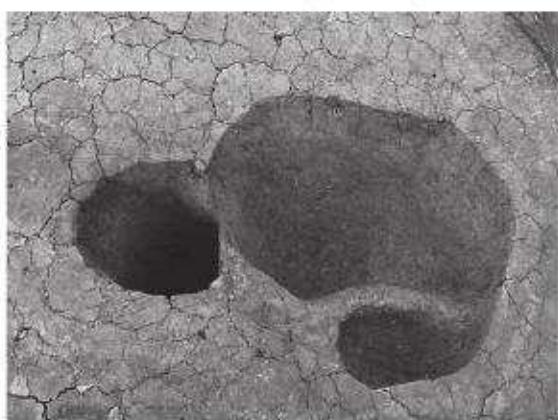
南壁土層断面 D-D'(北から)



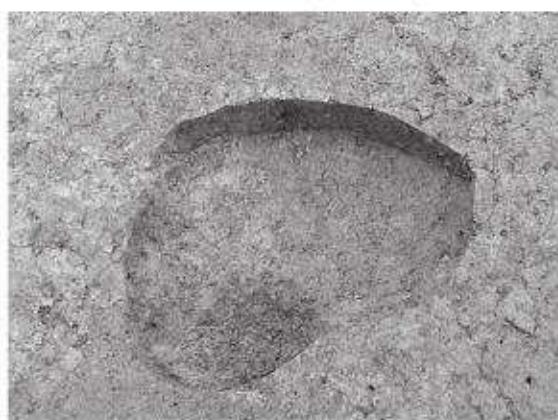
西壁土層断面 E-E'(北東から)



西壁土層断面 F-F'(北東から)



SK2 全景(南から)



SK3 全景(東から)

写真図版2 調査区土層断面・土坑



SD1 ~ 4 全景 (南東から)



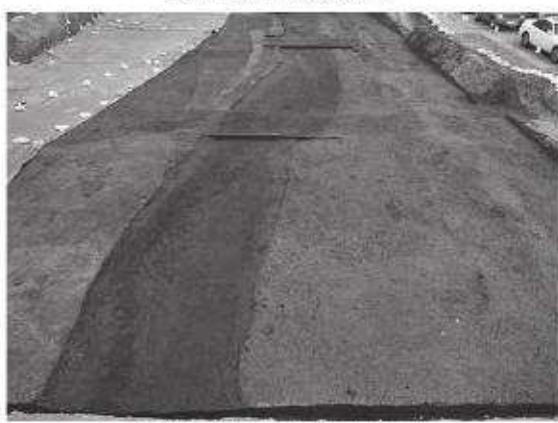
SD6 全景 (西から)



SD9H-I' 断面 (北東から)



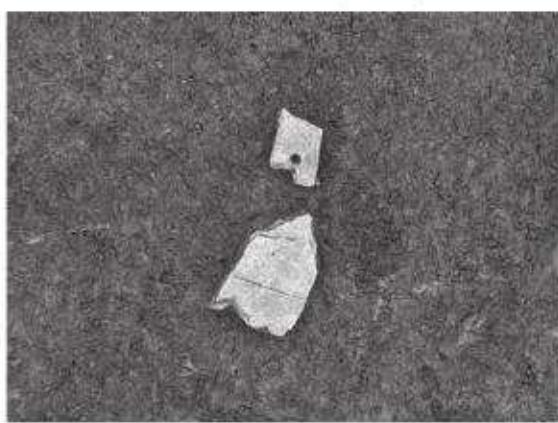
SD9J-J' 断面 (東から)



SD9A・B 検出状況 (東から)



SD9 全景 (西から)

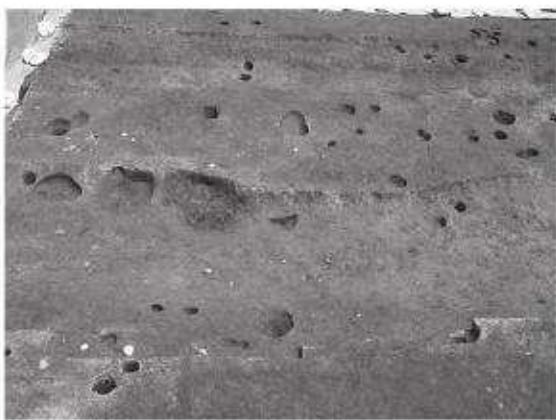


SD9 遺物 (kd-001) 出土状況 (南から)



SD9 遺物 (P-001) 出土状況 (西から)

写真図版3 溝跡



SI1 全景 (南から)



SI1SK1 炭化物検出状況 (南から)



SI2 全景 (南から)



SI3 全景 (南から)



SI4 全景 (東から)



SI5 全景 (北から)



SI6 全景 (北から)



SI7 断面 (北から)

写真図版4 竪穴住居跡・竪穴遺構(1)



SI7 全景 (東から)



SI7 遺物 (D-004) 出土状況 (北から)



SI7 遺物出土状況 (東から)



SI8 全景 (北から)



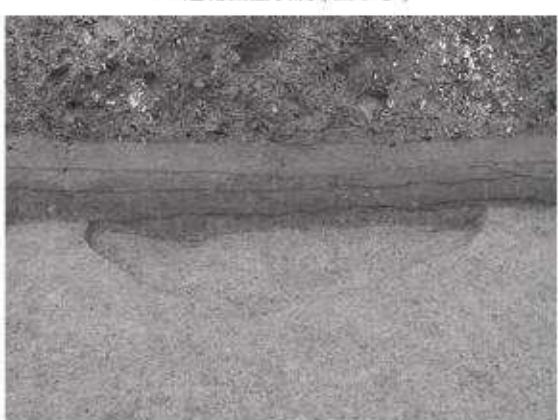
SI8 遺物出土状況 (西から)



SI8 遺物出土状況 (西から)

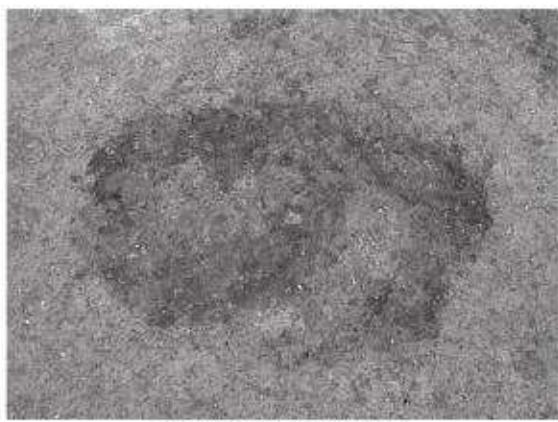


SK1 全景 (西から)

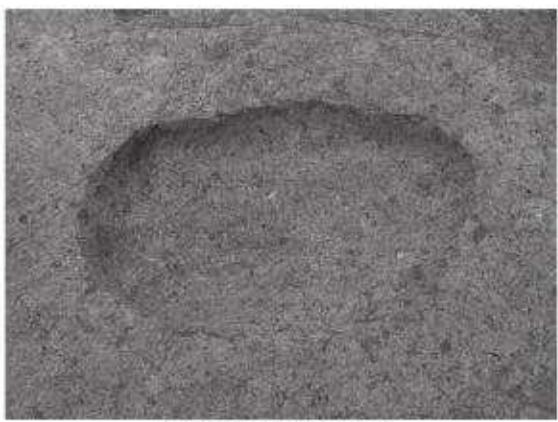


SK5 全景 (北から)

写真図版5 竪穴遺構(2)・土坑(1)



SK13 検出状況(南西から)



SK13 全景(南西から)



SD7 全景(南東から)



SD7 遺物出土状況(東から)



SD11 全景(北西から)



SD12 全景(西から)

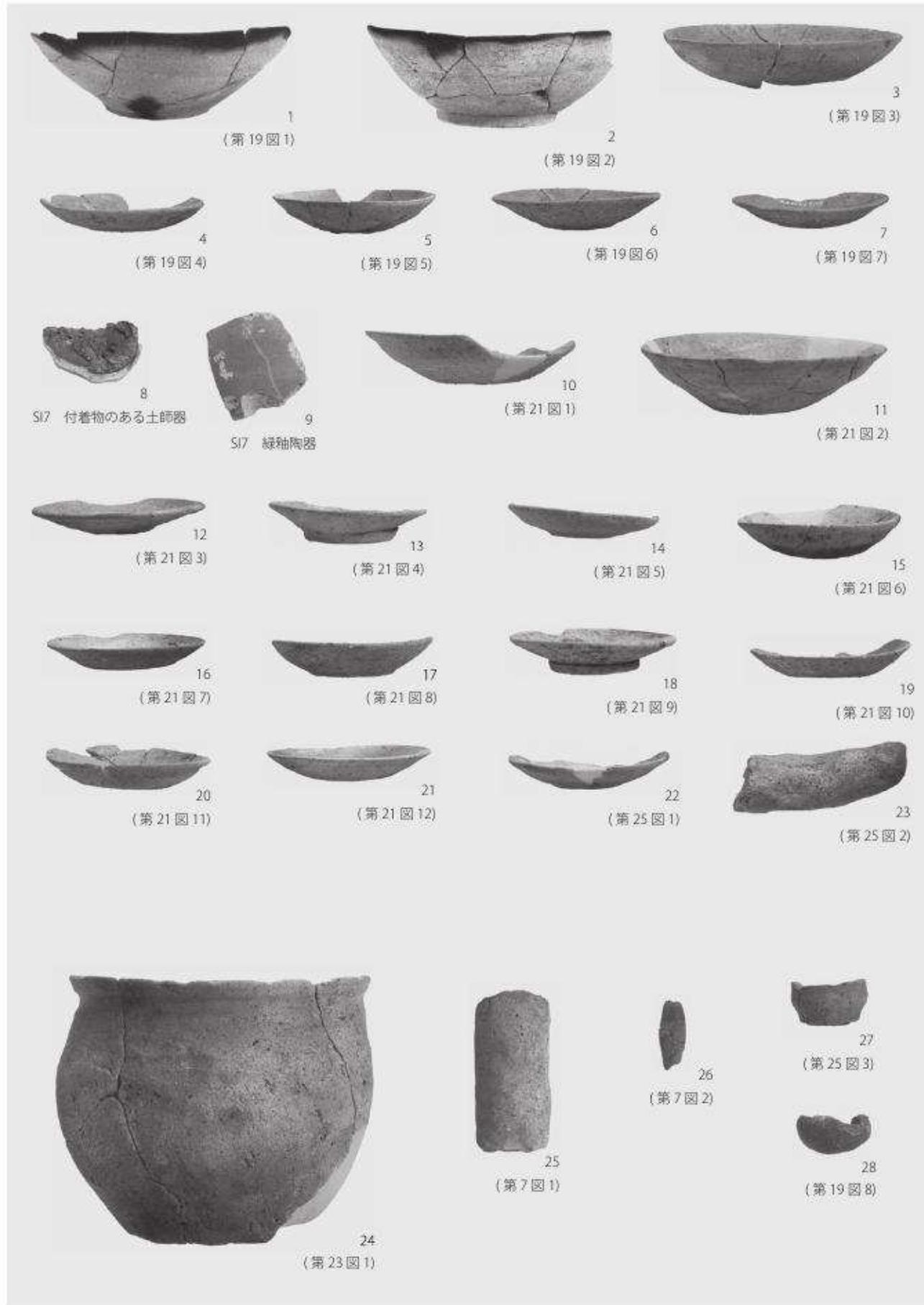


SD13 全景(北西から)

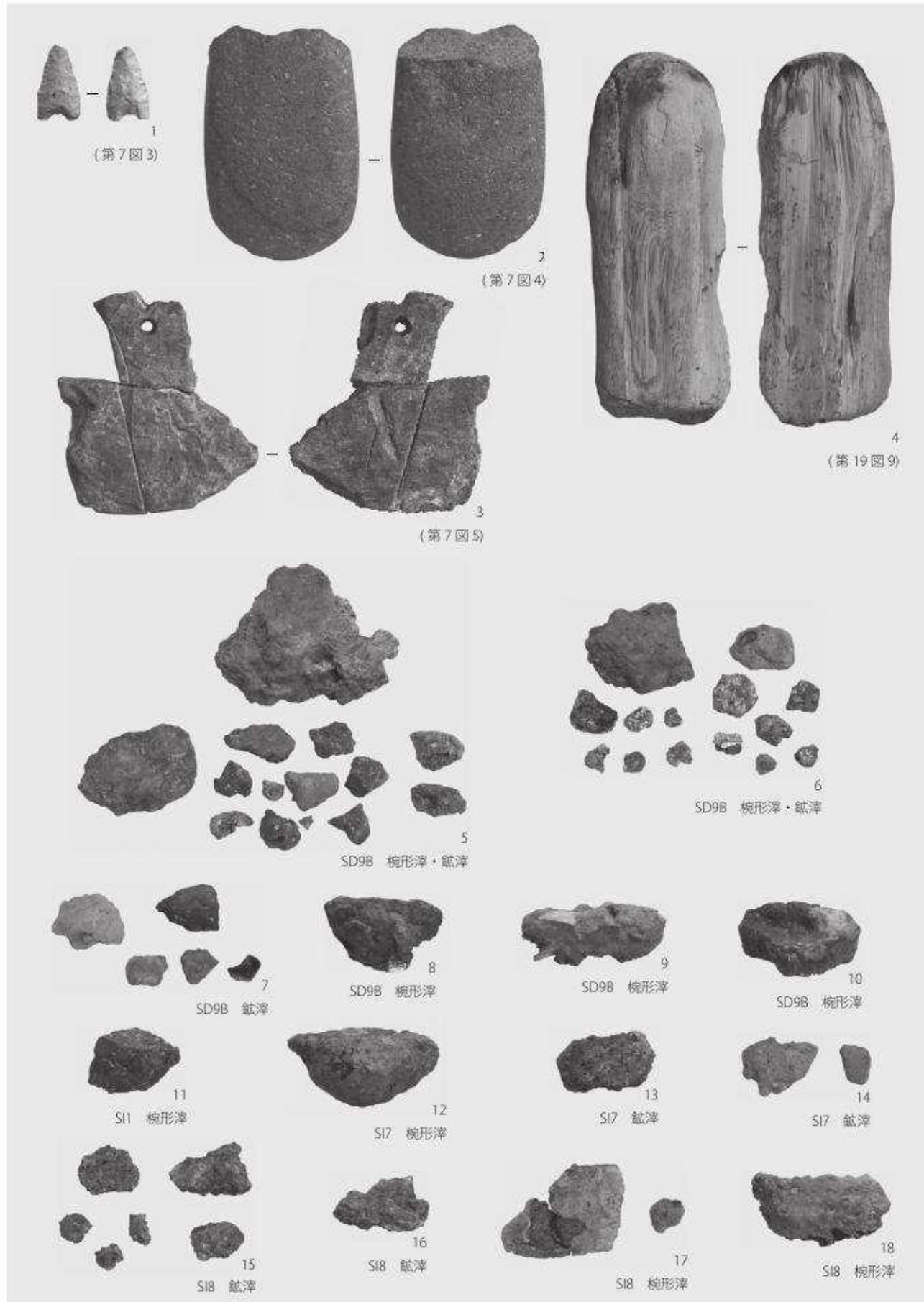


SX1 全景(南から)

写真図版6 土坑(2)・溝跡・性格不明遺構



写真図版7 出土遺物(1)



写真図版8 出土遺物(2)

報 告 書 抄 錄

仙台市文化財調査報告書第465集

鍛冶屋敷前遺跡第3次発掘調査報告書

2018年3月

発行 仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12 仙台市役所上杉分庁舎
TEL 022-214-8899(文化財課)

印刷 株式会社仙台紙工印刷

宮城県仙台市宮城野区苦竹3丁目1-14
TEL 022-231-2245
